

文部科学省指定事業

令和6年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業

【普通科改革支援事業】

実施報告書（第3年次）



令和7年3月

高知県立清水高等学校

目次

I	巻頭言	1
II	本校の概要	2
III	令和6年度 事業の概要	3
IV	実践報告Ⅰ「学校設定教科・科目 清水学際の開発」	14
V	実践報告Ⅱ「1年生総合的な探究の時間 活動報告」	17
VI	実践報告Ⅲ「2年生総合的な探究の時間 活動報告」	24
VII	実践報告Ⅳ「3年生総合的な探究の時間 活動報告」	31
VIII	実践報告Ⅴ「探究活動における外部機関との連携」	44
IX	実践報告Ⅵ「21世紀のジョン万育成プロジェクト」	49
X	実践報告Ⅶ「高大連携事業」	56
XI	実践報告Ⅷ「県外高等学校との連携事業」	58
XII	実践報告Ⅸ「高知大学訪問学習」	62
XIII	実践報告Ⅹ 先進校視察	65
XIV	実践報告Ⅺ「高知大学生との交流会」	67
	参考資料	68

指定校事業概念図

「清水学際」関係資料

令和7年度入学生教育課程

巻頭言

報告書の発刊にあたって

高知県立清水高等学校 田中 修一

令和4年度、本事業への参加において、本校が文部科学省に提出した計画書の「事業の目的」に次のような一節が記されています。

「清水高等学校は、土佐清水市唯一の高等学校であり、地域にとっても地域の振興や人づくりのためにはなくてはならない地域の最高学府として位置付けられており、土佐清水市の課題を解決していくために、グローバルな視点に立って新しいことにチャレンジし、劇的な変化を生み出すことができる人材を育成することを期待されている。このことは、同校が地域の最高学府として、少子化が進む同市において、地域の子どもたちを、地域において新たな価値を創造する人材に育成する責任を背負っているということに他ならない。」

本校の振興を図ることは、地域活性化の一翼を担うことになり、地域にとって希望の象徴である「若者」の活躍と成長を何としても果たし、将来の地域を担う人材を育成しなければならない強い決意のもと出発しました。

「学際領域」学科の設置を目指した背景には、土佐清水市の優れた環境が大きく影響しています。言うまでもなく、雄大で豊かな自然をたたえている土佐清水の地形的、環境的な魅力やそこに暮らす人々の暮らし、歴史、文化、とりわけ、幕末から維新にかけて広く世界を見渡し、高い志を掲げた中浜万次郎、通称ジョン万次郎の生誕地として彼の生き方や考え方を直接学ぶことができることなど、潤沢な教育資源を有する地域であることで、我々は特色あるカリキュラムを開発するうえでは大変恩恵を受けました。一方、近年の少子高齢化による地域の活力減退を目の当たりにし、これからの故郷をどのように考えるか、抜き差しならない状況を高校生が真剣に考え、行動することも大変有意義であると考えました。まさに「社会に開かれた教育課程」を実現するカリキュラムづくりに専心した3年間であったと言えます。

この間に、高知県教育委員会、土佐清水市役所、高知大学、高知工科大学、土佐清水ジオパーク推進協議会、リクルート、キャリアリンク等のコンソーシアムの皆様、さらに運営指導委員の皆様には多大なるご支援をいただき、我々の背中をずっと押し続けていただきました。また、無理なお願いでしたが快諾いただき、常に学校の考え、取組について理解し、伴走いただいた2名のコーディネーターの方々にも心より感謝申し上げます。

高知県内ではまだ誰も経験していない「普通科改革」における学科改編に果敢に挑戦し、全力で取り組んでこられたのは、何よりも本校の教職員の熱意と努力があったことに尽きると思います。新しい時代にふさわしい清水高生の姿、そしてそれを実現させるためのカリキュラムとはどのようなものか、議論を重ねた結果が今日につながっていると思います。

今後は、自分たちで創出したカリキュラムを実際に運営しながら、さらに改善の営みをしていく必要があります。どうか、多くの方々にご協力をいただき、変わらぬご支援をいただくことができればありがたく思います。

これまで本研究に対して関わっていただいたすべての方々にあらためて謝意を申し上げ、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

令和7年3月 吉日

Ⅱ 本校の概要

- 1 所在地 〒787-0336 高知県土佐清水市加久見 8 9 3 - 1 (令和 7 年 3 月まで)
〒787-0330 高知県土佐清水市清水ヶ丘 2 6 - 2 2 (令和 7 年 4 月から)
- 2 学校の基本理念
 - (1) 校訓 「自由」「平等」「博愛」「寛容」
 - (2) 教育目標
地域の未来を担う人材の育成
～地域にとってかけがえのない高等学校としての役割を果たす～
 - (3) 目指す学校像
生徒一人一人が確実に成長できる教育活動を展開し、地域や保護者からの信頼を得ることで、生徒及び教職員が自信と誇りを持てる学校
 - (4) 目指す生徒像
 - ① 「確かな学力」
習得した知識及び技能を課題解決のために活用する思考力・判断力・表現力を身に付けることで、生涯にわたって学び続ける資質・能力が備わった生徒
 - ② 「人間力の涵養」
困難な状況に置かれても、的確に状況を分析し、解決に向けて最後まで前向きに、粘り強く取り組もうとする生徒
 - ③ 「社会性の育成」
他者と協働し、さまざまな課題を解決しようとする中で、地域社会の構成員としての自覚と責任を持ち、地域に貢献しようとする生徒
 - (5) 目指す教師像
 - ① 生徒の能動的な学びを促す授業づくりができる教師
 - ② 生徒の自立をしっかりと支えることができる教師
 - ③ 生徒、保護者、地域としっかりとコミュニケーションをとり、協働できる教師
 - ④ 学校内外の教育に広く関心を持ち、常に学ぶ姿勢と向上心を持っている教師
 - (6) 学校経営方針
第 4 期高知県教育振興基本計画に基づき、学校の教育活動を通して、探究力と国際感覚を身に付け、地域や社会に対して積極的に貢献しようとする強い意志と思いやりの心を持った人材を育成する
 - (7) 重点的な取組(全日制)
 - ① 思考力・判断力・表現力の育成
 - ② 社会性の育成
 - ③ 基本的な生活習慣の確立
 - ④ 地域及び連携型中高一貫教育の推進
 - ⑤ 生徒理解・生徒支援の充実
 - ⑥ 国際理解教育の推進
 - (8) 生徒数(全日制)
111 名(1 年: 42 名、2 年: 21 名、3 年: 48 名)

Ⅲ 令和6年度 事業の概要

1 事業の実績

(1) カリキュラムの検討内容

「21世紀のジョン・マン ” Think Globally, Act Locally”」をカリキュラム開発のメイン・コンセプトに設定した。「①自然科学、社会科学、人文科学の各分野について、横断的に学び、専門性にとらわれない柔軟な思考を身に付けることができる」、「②課題や目的を自ら設定し、国際的な視野で問題を解決しようとする態度を身に付けることができる」、「③多様な他者と協働して新たな価値を創造する力を身に付けることができる」、この3つの力を身に付けた人材育成を目的としたカリキュラム開発に向けて検討を行った。

このカリキュラム開発については「特定の分野に偏らない学びを実現させるため、文理融合した教科等横断的なカリキュラムを開発すること」、「最先端の科学を学ぶため、自然科学・社会科学・人文科学等の分野について、大学、研究機関、官公庁、民間企業等と連携すること」、「国際的な視野を身に付けさせるため、英語教育を充実し、国際交流を促進すること」、「コンソーシアムと連携し、学校内外が一体化した教育活動を行うことで、社会に開かれた教育課程を実現すること」の4点を目標として取り組むこととした。具体的な取組の内容としては以下のとおりである。

取組① カリキュラム開発事業

ア 新たな校務分掌による推進体制の構築（実践報告Ⅰ参照）

本年度新たに新学科設立に向けた具体的なカリキュラム開発のために、総合企画部を新設し、学校設定教科・科目「清水学際」について、具体的なカリキュラム開発を行った。開発については、総合企画部を中心とした学校設定教科・科目ワーキンググループ（以下、「WG」という。）を構築した。WGでは3年間を見通した年間指導計画及び評価の観点や評価方法について開発を行った。

イ コンソーシアムとの連携（実践報告Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅷ参照）

ウ 高大連携事業（実践報告Ⅵ、Ⅷ参照）

取組② 地域連携事業

ア 地域連携コーディネーターと協働し、地域とつながる総合的な探究の時間のカリキュラム開発（実践報告Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ参照）

イ 土佐清水リゾート合同会社 TheMana Village との連携強化

学校運営協議会委員である「TheMana Village」の小泉貴裕氏には、学校振興についての助言をいただき、地域連携の核を担っていただいている。

総合的な探究の時間に、昨年度から地元食材を活用したお菓子作りについてというテーマで取り組んでいる生徒がいるが、その生徒が考案したスイーツをホテル内のイタリアンレストランのメニューに追加していただいた。また、令和7年3月15日（土）に行われるホテルのリニューアルオープン3周年記念イベントには部活動が複数参加し、部活動での取組を披露する予定である。3年生の就職内定者もあり、進路保障にもつながっている。本年度は、新たにホテルの担当者を地域学校協働推進員に委嘱して連携強化を図った。

ウ 土佐清水市との連携強化

土佐清水市では市の未来を創造する人材を育成し、土佐清水市の活性化を図るために、土佐清水市地域コンソーシアムを設置している。その一環として、土佐清水市の教育の魅力化推進コーディネーターを中心に、小中高12年間を通して「ジョン万スピリットを継承する人材育成」を目指したプログラム開発を行っている。総合的な探究の時間を軸とし、小中高切れ目のない教育を目指して各校の担当者が協働し、プログラム実施に向けた取組を検討していくことが今後の課題である。

取組③ 中高一貫教育事業

ア 校舎移転後を見据えた中高連携の在り方を協議

土佐清水市連携型中高一貫教育推進協議会を組織し、校舎移転後を見据えた中高連携の目指すべき方向性を協議した。そこでは、学力向上を図り、キャリア教育の推進を目指すため、中高交流授業の実施や、授業改善に向けて中高の教員が教材研究や指導方法について協議する場を設け、①公開授業を通して相互理解を深めること、②中高6年間を見通したキャリア教育を推進するために、各種検定等の資格取得に向けた支援等を行うこと、③部活動や学校交流の活性化を図り、地域に貢献していくために、学校行事への参加や生徒会活動への積極参加・部活動の交流など、地域交流を推進することについて検討した。令和6年4月4日(木)には中高合同職員会議を開催し、施設設備及び中高学校運営等について合同で協議した。また、中学校および高等学校の管理職等による月1回の定例会議を開催し、移転に関わる懸案事項の整理を行った。管理職等による定例会議の実施によってお互いの現状と課題を理解することにつながったものの、管理職以外の教職員の相互理解を深めるための方策を検討・実施していく必要がある。

イ 高校説明会の実施(在校生・卒業生の参加)

令和6年4月から6月に、本校校長が土佐清水市内の小学校、清水中学校及び近隣中学校主催の高校説明会やPTA総会に参加した。また、清水中学校においては、令和6年10月23日(水)の文化祭や12月20日(金)の2、3年生進路ロングホームで、本校在校生や卒業生が本校の取組や魅力について説明した。

また、令和6年10月1日(火)には中学生1日体験入学を実施し、生徒会執行部による学校説明や教科横断型授業体験をとおして本校の魅力ある取組について紹介した。高校の取組や新学科の特色などを知ってもらう機会となった。ホームページの更新頻度は高いが、清水高校生の日常の様子を知ってもらうためには、SNS等の活用を検討する必要がある。

ウ 部活動・学校行事の連携

部活動においては、清水中学校と合同練習や合同発表を開催し、互いに技術の向上を目指しつつ交流を深めている。本年度新たに発足した硬式テニス部は、地域連携および部活動指導員を効果的に活用でき、全国選抜高校テニス大会四国地区大会に進出することができた。部活動での合同練習は高校の魅力発信につながっている。

エ 相互の授業参観

本校PTA総会におけるジョン万次郎の生き方をテーマとしたキャリア講演会や各学期に実施する授業参観は、本校教育活動の理解を深める機会になった。また、高知の魅力発信グローバル人材育成事業における合同授業研究会が、清水小学校、清水中学校、清水高校で実施され、小中高の学びのつながりを意識した授業研究となった。

オ 土佐清水市校長会への参加

昨年に引き続き、本校校長が土佐清水市校長会に参加したことで、小中高の連携を意識した教育について協議する機会を設けることができ、清水高校の現状や今後の取組について情報共有することができた。土佐清水市地域コンソーシアムが目的としている「土佐清水市の未来を創造する人材を育成し、土佐清水市の活性化を図る」ことについて、学校長間で密に連絡を取り合うことで、小中高間の連携が強化されると考える。

取組④ グローバル教育(実践報告VI参照)

取組⑤ 先進校視察(実践報告X参照)

取組⑥ 県外高等学校との連携(実践報告VIII参照)

(2) 管理機関による事業の実施体制や管理方法

【実施体制】

ア グローバル教育推進事業

高知県では「高知県版グローバル教育」として、「探究的な学びを通して、生徒の論理的思考力や判断力、表現力を育成するとともに、英語運用能力を高め、将来グローバルな視点をもって本県の地域振興や産業振興を担う人材の育成を図る教育」を推進するために、推進校を指定し、その取組について有識者から指導・助言をいただく「グローバル教育推進委員会」で進捗管理を行っている。清水高等学校の本事業における取組は、高知県版グローバル教育の本質そのものであり、本県のグローバル教育の推進校として位置付けられていると考える。

イ 土佐清水市地域コンソーシアム

「清水高等学校魅力化計画」を令和2年度から地元の清水小学校及び清水中学校の校長、土佐清水市教育委員会、高知県教育委員会等とで進めており、令和4年度から土佐清水市地域コンソーシアムとして、行政・民間と一体となった取組へ拡大している。「土佐清水市を活性化できる人材育成」を目標とし、小中高が連携・協働しながらどのように取り組んでいくのかを協議し、アクションプラン実施に向けた取組を行っている。

【管理方法】

高知県教育委員会では清水高等学校の事業推進について、事業の目的及び目標の適切な設定と、取組における進捗状況の管理及び指導・助言を行う運営指導委員会を組織している。運営指導委員には、探究学習についての学識経験者、また高等学校改革において探究に関わる研究者、土佐清水市教育長、高知県教育委員会から構成することとし、運営指導委員会は年間2回開催した。また、今後はコンソーシアムとの協働により検討された計画や教育課程についても、高知県教育委員会および清水高等学校で検証及び修正を行うものとする。

(3) 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

校内研究推進体制として、学際領域学科検討委員会（以下、「検討委員会」という。）を立ち上げ、校長を委員長、教頭を事業総括責任者として位置づけ、主幹教諭、総務主任、教務主任、生徒指導主事、進路指導主事、総合企画部長、各学年主任、コーディネーターを構成員とし、カリキュラム開発に取り組むこととした。

検討委員会は毎月1回開催し、年度当初に目的等の研究構想全体の共有を図り、総合的な探究の時間や学校設定科目、国際理解教育の年間計画を策定した。年度末の達成目標に向けて、各月別の進捗状況を確認しながら推進を図った。

検討委員会の主な事業内容を以下のとおり設定した。

① 本事業で目的とする人材育成に向けたカリキュラム開発（総合的な探究の時間、学校設定教科・科目、国際理解教育）を検討し、学際的な学びを推進する。

② WGの協議内容を整理し、達成状況等の進捗管理を行う。

検討委員は、運営指導委員会及びコンソーシアムにオブザーバーとして参加し、必要に応じて学校の取組等を説明した。指導・助言に対しては、検討委員会で、事業の修正及び再構築に生かすよう協議した。

また大学や研究機関との連携を行う場合は、それぞれの取組について検討委員が窓口となり、各機関と協働的な研究を推進する体制を整備した。

事業の成果と課題については、高校魅力化評価システムにおける必要項目について指標を設定し、検証の材料とした。

(4) 運営委員会の体制および取組

ア 体制

所属	氏名	主な実績
関西学院大学 教育学部 准教授	岩坂 二規	自然保護から環境教育・ESD・SDGs のための教育と科学研究の発展を目的とする SDGs・生物多様性研究センターのセンター長。また、アメリカ研究における学際研究の手法を現代的なテーマに広く用いて、開発教育、グローバル教育などの分野に応用しながら、教育の課題について研究を行っている。
高知県公立大学 法人 理事長	伊藤 博明	高知県教育委員会前教育長。学校の組織力を高めながら、教員同士がチームを組んで主体的に学び合う「チーム学校」を推進。また、地域との連携・協働やデジタル社会に向けた教育にも力を入れている。
高知大学 地域協働学部 准教授	石筒 覚 ※	専門分野は、経済地理学・マレーシア経済論。高知県における地域と協働したサービスラーニングの開発について研究を行っている。
土佐清水市 教育長	斧川 哲也	土佐清水市教育行政関係者
高知県教育長	長岡 幹泰	管理機関

※ 近森憲助氏の退任により、石筒覚委員が就任

イ 内容

(ア) 第1回運営指導委員会での協議内容等

a 日 時：令和6年8月6日(火) 13:30～15:30

b 場 所：高知県立清水高等学校 会議室

c 出席者：

(運営指導委員)

岩坂二規委員、伊藤博明委員、石筒覚委員、斧川哲也委員

(学校)

校長 田中修一、教頭 上岡正紀、主幹教諭 南友博

教諭 山崎大、小島大知、森撰子、金井美穂、崎山沙耶香、武政亮二、境竜也
坂本亮、深原大誠

国際教育コーディネーター 谷 富貴

地域連携コーディネーター 二宮真弓

土佐清水市教育の魅力化推進コーディネーター 岡村相良

(高等学校振興課)

課長補佐 大石佳代、指導主事 小島由峰子

d 協議内容

【協議題】「地域から世界を見渡すにはどのような視点・取組が効果的か」

(委員からの助言)

- ・土佐清水市のこれからの活性化・発展に向けては、清水高校の魅力化は必須条件だと考えている。
- ・学校設定教科・科目「清水学際」の内容検討を進める中で、教員が担当する教科との関連性、また担当科目へのフィードバックの体制が分かりづらい。将来的に、チーム・ティーチング的に複数の教員でチームを構成することが前提であると考えるよいか。
- ・各担当教員が集結し、学際の部分の教科研究会的なものに、しっかりと取り組む必要があるのではないか。清水学際と総合的な探究の時間を含めた配置について、総合的な探究の時間は外部機関と連携した個人探究とのことだが、現時点での具体的なイメージは決まっているか。
- ・INPUT が清水学際で、OUTPUT が総合的な探究の時間として、その関連性につ

いては、このような形で進めたいというイメージはあるか。

- ・テーマの設定は、生徒たちが教員にリクエストし、学校ができることを共に考え、巻き込み、参画できるような清水学際Ⅲの位置づけになると素晴らしいと思った。
- ・協議題について、この『地域から世界を見渡すにはどのような視点で取り組みば効果的か』という、その設定の理由と協議のポイントを見てみると、清水学際と総合的な探究の時間との枠組みや関連性が、協議題とも大きく関連してくるのではないか。
- ・生徒の「また地域の学習か」という反応について、小中学校での経験をプラスに活かせる部分と、次にどうつなげるのかを考える必要がある。産業と行政の問題を自分事として取り組む可能性はある。清水学際Ⅰでは『人』がテーマとなっており、その『人』を主に、産業・行政において、人との関わりを上手く作り出すと糸口はあるのかなと思う。
- ・小中学校の学び方がどうであったのかということ把握しておくことは必要。また『人』とのつながりも重要。
- ・小学校数は少ないが、校区の地域性がそれぞれあり、各学校独自の地域学習を行っている。12年間で小中高が連携し、小学校で「知る」、中学校で「考える」、高校で「動く」という一つの流れが提示され、今年度から流れに沿った学習スタイルに取り組んでいる。
- ・清水高校の3年間を出口とし、清水市内の小中学校はそこに合わせて12年間での学びにしようと、既にスタートしている。人とのつながりを活かすということが必要。
- ・高校では社会の役に立つであるとか、目的意識がもてるような取り組みが必要。社会とのつながりや自分の位置づけなどを出していくことが必要。
- ・自分自身が学んだことや学習したことが、後へどのようにつながり、広がっていくのか、社会と自分とのつながりや自分の位置づけが、主体的に取り組むことへつながるのではないかと感じた。
- ・これまでで一番内容的に整理された分かりやすいシステムができたと思っているが、生徒に対しては、こういう力を身に付け、こういう人になって欲しいという思いを与え過ぎている感じがする。遠いところの問題から入る視点は、是非今後増やしてみしてほしい。
- ・自分と違う考え方や、自分が育った環境とは違うものを知り、そういうことから何らかの関係を構築していくことが国際理解教育である。最終的には行動に出てこそ初めて、資質や能力が身に付いたと言える。行動に出てこそ、初めて評価されるべきであるというところを大事にしたい。
- ・外部の方など先生とは別の人の話を聞くことは、小・中学校でそれはできているのかなと考えていたが、高校の授業の中でも継続的に作る必要性があるのか？
- ・進学や就職において、国際社会まで含めたグローバルな社会を考えると、1年生の時に自己理解をさせることが必要。ただ、人との関わりを増やすと教員の負担が確実に増える。バランスをどのようにとるかという問題はある。
- ・英語のカリキュラムでは、1年生では自分や地域を知り、2年生では自分の住んでいる国のことを知り、3年生では国際社会を意識するという学習過程に取り組むことで、表現する力がついていくのではないか。
- ・考え方が非常によく練られ、まとまってきていると思う。取り組みの中で出てくる様々な気づきを、その都度取り組みに活かせるとよいと思う。本質や本来の目的・原因は何か、それを突き止めることが、全ての解決方法につながっていく。学生の興味をしっかりと担保しながら、「なぜ」を大切にすることが大事。
- ・大事だと思うのは、生徒と教員が共に学び合うことが、この学際の面白さでもある。そこに出てくる新しい発見や地域の面白さを共有できるような場があると、面白くなるのではないか。

- ・育成する資質に、新たな価値を創造する力を入れているからには、生徒が出してくる新しいもの、こちらが与えようとしていなかったものを、大事にできるような形がいいのではないか。
- ・1年生の清水学際をいかに面白くするか。INPUTで全て取り組んでしまうと、ここでつまづくのではないのか。1年生も清水学際はINPUT・OUTPUTを上手く組み合わせ、面白く取り組める形が一番主体的な活動につながっていくのではないかと感じた。最後に大人が考えたものを設定しても、なかなか探究的・主体的な学びにはつながらない。小・中学校での学ばせ方が「また地域か」と思わせている可能性もある。高校1年生で再度「学ぶこと」は面白いのだというような、1年の清水学際を目指して取り組めば、より深まり広がっていくのではないのかと感じた。

(イ) 第2回運営指導委員会での協議内容等

a 日 時：令和7年1月30日(木) 13:30～15:30

b 場 所：高知県立清水高等学校 視聴覚室

c 出席者：

(運営指導委員)

岩坂二規委員、石筒覚委員、斧川哲也委員

(学校)

校長 田中修一、教頭 上岡正紀、事務長 岡本直也

主幹教諭 南友博、教諭 金井美穂、小島大和、森摂子、崎山沙耶香、武政亮二
境竜也、坂本亮、氏次礼

国際教育コーディネーター 谷 富貴

地域連携コーディネーター 二宮真弓

土佐清水市教育の魅力化推進コーディネーター 岡村相良

(高等学校振興課)

課長 野田健一、課長補佐 大石佳代、チーフ 中越啓介

指導主事 小島由峰子

d 協議内容

【協議題】「未来共創科」における特色ある学び(学際カリキュラム)を成長させていくための仕組みをどのように作ればよいか」

(委員からの助言)

- ・清水学際、総合的な探究の時間だけでなく他教科との関連づけをどのように行なっていくかポイントになる。
- ・教員は県外交流やイベントなど新たな取組が行われていることへの負担感をどのように感じているか、また生徒にとって情報過多になっていないか。
- ・清水学際の内容を先行実施しているが、教員は成果と課題についてどのように受け止めているか。清水学際Ⅰの年間計画はイメージされているか。
- ・協議題の「未来共創科を成長させていくため」とは、学科をどのように成長させていくのか、あるいは特色ある学びを行なっていく中で生徒の成長を促す仕組みづくりを指しているのか。
- ・土佐清水にはジオや地形、防災、漁業、産業振興、ジョン万次郎、高齢化・観光などテーマ・課題が豊富にある。それぞれが教科横断的に関連付けできる内容を含んでいる。それらをどのように教材として整理し1年生のベースにしていくなか、生徒の関心にあわせて2年次以降に徐々に広げていく方向性が良いのではないか。1年次には地域との関わりを多く持つことが重要になる。
- ・3年間の取組の結果を参考にして、清水高校の理念と合致する地域の関係機関や卒業生等と連携し組織化できれば良いのではないか。
- ・活動内容を全てカリキュラム内で行なわなくても良いのではないか。地域活動の一環として取り組んではどうか。
- ・これまでの取組の成果を評価し、継続的な取組としていく事が重要である。

- ・ワーキンググループ等の活動をマンネリ化しないよう工夫していくことが大事である。教員の研修として位置づけ、成果・実績としての積み上げになればよい。
- ・生徒の変容をどのように評価していくか重要となる。教員も一緒に楽しんで活動していくことが大事なのではないか。
- ・カリキュラム外の活動が生徒のエンジェンシーを育む重要な場所になるのではないか。
- ・地域との関連した活動から高知県外や世界を意識した内容を構築していけたら良いのではないか。
- ・土佐清水市では、令和4年度から小中高一貫で探究と外国語の2本柱とした教育活動を展開している。清水高校の目指す人材像「21世紀のジョン万次郎」をイメージした小中学校の具体的な取組を構築している。
- ・次年度以降につながるような実体験を積み重ねていく事が仕組みづくりにとって重要である。やりたい事を、知恵を出し合って定期的に検証していくことが大事ではないか。
- ・教員にとっても新しい取組ができる良い機会ではないか。
- ・地域の関係機関と連携し、地域の資源や特色などを活かした学びとして教育課程にしっかりと落とし込まれ、成果が期待できる姿が出来上がっていると感じている。
- ・効果的な取り組みのためには、学際カリキュラムをどんどん高度化・充実化させていくというより、現在の内容についてしっかりPDCAサイクルを回して、成果や反省を踏まえて改善を検討していく方法が効果的でかつ持続性があると考ええる。
- ・清水高校の特色（強み）である地元小中高12年を通した人材育成のカリキュラムの構築の推進に向けては、大変重要な視点である。清水高校を含め土佐清水市の教育全体の中で検討を進められたらと考える。
- ・取組みを継続し、進化させていくためには、教職員をはじめとする関係者がこの取組みの目的や意義を理解し、「熱意」を持って取り組んでいくことが重要である。
- ・PDCAサイクルを回していくためには、KPIの設定が大変重要になる。現在は、生徒に対するアンケート結果をKPIとしているが、客観性が弱く、課題の洗い出しに活用しにくい。定量的なKPIをいくつか設定することを検討してはどうか。
- ・進路指導のスケジュールと教育課程とを連動させることで、更に生徒にとって有意義な取組みになるのではないか。
- ・探究論文は様々なテーマについて、良くまとめられている。論文を作成することのねらいを再確認し、そのねらいが達成できているか検証し、より目的を達成するためには何が必要だったのかを検証していただきたい。

(5) コンソーシアムの体制および取組

ア 体制

所属	氏名	主な実績
高知工科大学事務局役 識者企画監	福田 直史	高校生に対して高知工科大学で実践されている最先端の研究を分かりやすく説明。
高知大学 地域協働学部講師	今城 逸雄	大学において地域をフィールドにした探究学習を実践。
土佐清水ジオパーク推 進協議会 ジオパーク専門員	土井 恵治	南海トラフ地震の最前線地でジオパーク活動に従事。
リクルート 横断人事統括室 ヒトラボ	福田 竹志	「ミネルバ方式」について小中高の教職員に研修会等を実施。
キャリアリンク 代表取締役	若江 眞紀	南あわじ市で小中一貫したコアカリキュラム作成に従事。
清水小学校 校長	佐竹 正史	小学校における英語教育や SDGs の取組に従事。
清水中学校 校長	門田 直子	中学校における英語教育や SDGs の取組に従事。

イ 内容

(ア) 第1回コンソーシアム代表者会議での協議内容等

a 日 時：令和6年9月4日（水）13:30～15:30

b 場 所：高知県立清水高等学校 会議室

c 出席者：

(コンソーシアム代表委員)

福田直史委員、今城逸雄委員、土井恵治委員、福田竹志委員

佐竹正史委員、門田直子委員

(学校)

校長 田中修一、教頭 上岡正紀、事務長 岡本直也

主幹教諭 南友博、教諭 山崎大、森摂子、桑田将貴

国際教育コーディネーター 谷 富貴

地域連携コーディネーター 二宮真弓

(高等学校振興課)

指導主事 小島由峰子

d 協議内容

- ・生徒の現状の中で、物事を考える新しい視点をどう見つけるか、そういうきっかけを作れたらと思う。
- ・ジョン万のスピーチコンテスト（英語暗唱大会）後の交流場面では、コミュニケーション能力や英語活用において心配をしていたが、英語は苦手でも外国の方と触れ合おうという意識を持つ生徒が多く、ジョン万スピリットに通じるところがあり嬉しかった。
- ・小学校でも、国際的な垣根を考えるとなくコミュニケーションを取ろうとしている姿が良かった。
- ・生徒たちは行動する場を与えると力を発揮するということを、強く感じた。
- ・「視野を広く持たせる」という言葉は、探究という割には、教え込むようなニュアンスが強い。「視野を広く持つ」でもいいと思う。

- ・「経験を積む」「何でもやってみよう」など能動的に、子どもたちへ言葉で伝える方がいいのではないか。
- ・探究するテーマを決めるところが難しいと思う。1年次で総合的な探究の時間を取らないのであれば、SDGsを通じて日常生活と組み合わせて考えることに力を入れてもらえたらいいと思う。
- ・学び方を学ばないで問いを立てるといのはなかなか難しいと思う。
- ・問いを立てるだけではなく、「なぜならば」というところまでいけるようにした方がいいと思う。
- ・探究に取り組むことで、モチベーションが上がるのに、実際にやらない時間が1年続くというのはもったいないと思う。
- ・国際社会に貢献することを目標としてジョン万スピリットを掲げているなら、3年後には海外留学する子を育てることに意識持って取り組むと良いと思う。
- ・世界の課題について解決方法を考えるとき、課題は何であれそれを評価につなげるために、どんな仕掛けを作ってあげるのかということが、大事ではないかと感じる。
- ・海外の方と交流した際、他国の背景を「調べてみよう」という展開はあったのか。「調べてみよう」という時間を作る仕組みが重要。
- ・直接的な経験を仕組みとして広げていくことが必要。
- ・学びのツールは多くある。学校の教科ではなく、ハードルを下げて、子どもたちがしたいこと、興味を持っていることでいいと思う。現在、清水にも多くの外国の方がいるのではないか。例えば、水族館に来た外国人に対して、その子どもたちが観光ガイドするとかでもよいのではないか。
- ・小学校は学び方を学ぶ。基礎を学ぶ。課題であったり、探究の課題を見つけるのは難易度が高い。小学校の段階では、教員がまずは疑問に思い、それを子どもたちにも気づいてほしいところを、学びの勉強に積み重ねていくという、日々の学習のスタイルを続けていくことが必要。
- ・中学校では世界に向けてという視野はまだ弱い。教員が広い視野を持つことが大事。
- ・清水学際では、土佐清水が抱えている課題をSDGsに絡めて整理し、解決していくことが重要な科目になると思う。これは土佐清水ジオパークで活動している内容と、ほぼ一緒になる。ジオパークの関係者が全国から集まる場で、高校生にプレゼン（発表）をさせる機会を作っているため、清水高校も参加する機会を作ってみてはどうか。
- ・教員は、日常の面白いことの中にも、実は世界とつながっているということを問いかける意識が必要。
- ・教員も地域の課題を持つという根底の中で、他にも目を向けるという取り組みをしていて感じている。
- ・本質的には自己決定。「本質的な問いをどう持たせますか」ということについては、教えない、評価しない、自分で決めさせると考えている。
- ・知らなかったことを知っていく過程で、子どもたちは主体的になると思っている。失敗はあるだろうが、その中から学び取ることにはあり、それが成功した時に大きく成長するのではないかと思う。
- ・ジオパークの内容をこのカリキュラムにどのように組み込めばよいか考えていたが、生徒たちが自ら見つけた課題に対して、どのように解決していけるか、というスタンスで生徒たちと接していこうと思う。

(6) コーディネーターの配置および活動内容

ア 体制

国際教育コーディネーター：谷 富貴 氏

地域連携コーディネーター：二宮 真弓 氏

イ 活動記録（実践報告Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ参照）

国際教育コーディネーター及び地域連携コーディネーターの2名を配置している。勤務については都度謝金支払いとし、活動の場は学校もしくはオンラインとしているが、校外で実施される研修会等への参加も含んでいる。活動内容は以下のとおりである。

- ①大学・研究機関等における最先端の研究や、地域の関係機関と連携した地域資源を、高校との学びとマッチングさせるコーディネート業務
- ②総合的な探究の時間における、生徒への直接的な助言
- ③国際交流活動が、探究的・体験的な学びとなるような協議の場の設定
- ④英語教材の作成及び英語教育の担当者会における系統的な教育課程開発についての助言
- ⑤探究及び地域課題解決学習等に関わる関係機関との交渉、講師の依頼等の業務全般

(7) 新学科の設置及び配置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

ア 新学科の設置及び配置に向けた検討状況

(ア) 総合的な探究の時間（実践報告Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ参照）

(イ) 校内検討委員会

校内検討委員会においては、総合的な探究の時間、学校設定教科・科目、国際理解教育の検討内容の進捗を管理し、継続的なWGの活動となるように協議した。

(8) 管理機関における事業全体の成果検証、評価

高校魅力化評価システムのアンケート結果（三菱UFJリサーチ&コンサルティング）を用いて「清水高校が目指す学びについての生徒の変容」について、成果検証および評価を行った。アンケート項目及び、令和4年度から令和6年度の結果は、以下の表1のとおりである。アンケート結果から、「主体性・協働性・探究性・社会性に関する自己認識」の項目が全国平均を下回っていることが示唆された。今後これらを改善するために、日々の教育活動において、正解が出たら「終わり」ではなく、「なぜ」「どうして」という、常に次へつなげるための問いを授業の中で投げかけていき、継続的な思考が展開されるように授業実践を通し、生徒が探究的な思考を育める環境を設定することで、自己認識を高めていくきっかけとすることが必要である。また、地域に積極的に関わる教育活動を通して、協働性や社会性を育むことができるよう、大学や地域の関係機関、地域コーディネーター等と連携し、カリキュラム開発を検討していくことが課題である。

一方で、表2に示した「地域における学習環境」においては、全国平均を上回っている。これは、生徒を取り巻く教育環境が恵まれているということであり、土佐清水市の強みであることが示唆された。本校では地域コーディネーターを配置し、地域や関係機関との連携を担っている。このことが探究や地域課題解決学習の推進に効果的であると思われるため、今後も地域コーディネーターと連携しながら、活動の強化を図ることを継続していく。

表1 清水高校が目指す学びについての生徒の変容 ※ () 内は全国平均との差

項目	R 4	R 5	R 6
日本や世界の課題の解決方法について考える	53.3 (-0.2)	57.9 (+8.1)	56.5 (+7.2)
国際社会の課題解決に貢献したい	57.9 (-2.4)	48.7 (-10.6)	41.7 (-13.7)
まだ世の中にない新しい技術やサービスを生み出してみたい	57.0 (-1.3)	46.1 (-10.4)	44.4 (-9.5)
勉強したものを実際に応用してみる	69.2 (+0.8)	59.2 (-8.2)	57.4 (-10.2)
現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	66.4 (-6.9)	69.7 (-3.3)	65.7 (-7.3)
私に関わることで、社会状況が変えられるかもしれない	53.3 (-1.0)	38.2 (-11.4)	38.9 (-9.8)

表2 地域における学習環境

項目	R 4	R 5	R 6
地域の魅力や資源について考える	76.6 (+30.4)	73.3 (+26.0)	77.8 (+29.7)
活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	72.9 (+22.2)	72.4 (+22.8)	56.5 (+4.7)
地域の課題の解決方法について考える	73.8 (+24.9)	68.4 (+22.2)	72.2 (+24.1)
地域の人や課題などに直に触れる機会がある	72.9 (+16.0)	75.0 (+19.3)	74.1 (+15.4)
活動、学習のまとめを発表する	69.2 (+0.2)	84.2 (+19.2)	82.4 (+16.7)

IV 実践報告 I 「学校設定教科・科目 清水学際の開発」

1 学校設定教科・科目ワーキンググループについて

昨年度定期的に開催されたワーキンググループの定例会において「清水学際」のカリキュラムの検討が行われた。本年度も継続してミーティングを開催し、「清水学際」のカリキュラムの検討及び指導計画の作成等に取り組んだ。

2 内容

(1) 第1回ワーキンググループミーティング

○日時：令和6年5月28日（火）11:45～

○主な協議題

学校設定教科・科目の設置に向けて今年度取り組むべきこと及び担当者の割り振りについて協議した。「清水学際Ⅰ」では、7月中に指導計画を完成させ、設定教科設置届出書及び設定科目設置届出書を県教育委員会に提出すること、また、SDGsの4領域（「9 産業と技術革新の基盤を作ろう（以下「産業」という。）」「10 人や国の不平等をなくそう（以下「人権」という。）」「14 海の豊かさを守ろう（以下「海」という。）」「15 陸の豊かさを守ろう（以下「陸」という。）」）について学習し、「11 住み続けられるまちづくりを」は、2年次の「清水学際Ⅱ」で主に実施していくことを確認した。「清水学際Ⅱ」については、「〇〇プロジェクト」に取り組み、最後に要望・提案をすることや、「清水学際Ⅱ」と総合的な探究の時間の関連性について確認した。「清水学際Ⅲ」については、「清水学際Ⅰ・Ⅱ」及び総合的な探究の時間の学習内容等をアウトプットする方法を学ぶことを確認した。今後、評価方法について検討していくこととした。

(2) 第2回ワーキンググループミーティング

○日時：令和6年6月19日（水）16:00～

○主な協議題

まず、学びのグランドデザインの案を確認した。来年度の1年生が3年間の学びをイメージできるように、という視点をもって作成したこと、また、「清水学際」と総合的な探究の時間が両輪であり、「清水学際」がインプットで総合的な探究の時間がアウトプットであることや、ベースには重点育成能力があることなどが分かるように作成したことが共有された。続いて「清水学際Ⅰ」の各領域の担当者から計画について説明があり、その内容について全体で検討した。次年度の予算計上のために、外部講師の招へいやフィールドワークの行き先と回数などの情報が必要であることを確認した。

(3) 第3回ワーキンググループミーティング

○日時：令和6年7月25日（木）13:30～

○主な協議題

前回に引き続き「清水学際Ⅰ」の各領域の計画について、追加項目や内容等の確認を行った。特に「10 人権」について、SDGsゲームを実施したり、家庭科や保健体育科と調整したりしながら認知症や高齢者体験など実体験を伴う活動を取り入れ、最後はノーマライゼーションマップ作成などにつなげてはどうかという案が出された。年間計画において何をどの順番で実施するかについても検討した。現段階では、①ガイダンス（「学際とは？」）・高知大学訪問、②「10 人権」、③「9 産業」、④「14 海」、⑤「15 陸」、⑥まとめ・2年のプロジェクト選択、という順番とした。また、「清水学際Ⅱ」の内容の詳細を検討していくことで1年次に学ばせておくべきことがより明確になるのではないかとということで、今回は「清水学際Ⅱ」の内容を検討することとした。

(4) 第4回ワーキンググループミーティング

○日時：令和6年8月8日（木）13:30～

○主な協議題

「清水学際Ⅱ」について、4つのプロジェクト（①福祉×観光、②国際×観光、③チャレンジショップ、④国立公園）の詳細案が担当者より提示され、その内容を検討した。また、「清水学際Ⅱ」から考える「清水学際Ⅰ」で学ばせておくべきことや、以下の内容について提案があった。

- ・問いの設定をする（年度の初めと終わりに同じ問いを投げかける）
- ・年度末の発表会は、大きな会場で実施したい
- ・土佐清水市中高生みらい議会の日程変更が可能かどうか、市と中学校に確認が必要である。従来通り7から8月の開催であれば、次年度に学際Ⅱで参加するのか検討する。
- ・予算（令和8年度に向けて令和7年度の今頃には、何にどれくらい予算が必要かの見通しが必要）や週休日の活動にあたっての教員の勤務の振替や引率を担当する人員等も必要

「清水学際Ⅰ」の各領域の計画について追加項目や内容等の確認を行い、学習内容の時期の入れ替えを検討した。学年の早い段階で「10 人権」の「公平・公正」に関する内容を行うとよいのではないかという意見が出された。また、「9 産業」の領域を前半（データ分析）と後半（政策づくり）に分けて、前半は年度の早い段階で、後半は年度のまとめの前に行うのはどうかという意見や、「立案・提案・交渉」の部分は、生徒がいろいろなことを学んだ後に考えさせることで活動により取り組みやすくなるのではないかという意見が出され、年間計画の見直しが進んだ。

(5) 第5回ワーキンググループミーティング

○日時：令和6年8月28日（水）16:00～

○主な協議題

「清水学際Ⅰ」の評価方法について検討した。観点別評価や数値による評価と、文章記述による評価の両方について、各領域で想定される評価規準や方法、場面等をいくつか挙げて話し合った。その中で、土佐清水市の大きな地図に活動の様子を書き込んだり、写真を貼ったりして、学習の成果物として残せるようにするアイデアが出された。

「清水学際Ⅰ」の年間計画は、前回の検討内容を整理し、①ガイダンス（「学際とは？」）・高知大学訪問、②「10 人権」、③「9 産業」前半（データ分析）、④「14 海」、⑤「15 陸」、⑥「9 産業」後半（政策づくり）、⑦まとめ・2年のプロジェクト選択に向けて、という順番で行うことを再度検討した。

(6) 第6回ワーキンググループミーティング

○日時：令和6年9月18日（水）16:00～

○主な協議題

「清水学際Ⅰ」の実施内容や年間計画を再度確認し、年度末にはどういった形で学習のまとめを行うかも検討した。前回、年間計画の検討の際に、「10 人権」のフィールドワーク（地域のバリアフリー化マップづくり）の実施時期を1月後半にしてはどうかという提案があり、①ガイダンス（「学際とは？」）・高知大学訪問、②「10 人権」前半、③「9 産業」前半（データ分析）、④「14 海」、⑤「15 陸」、⑥「10 人権」後半、⑦「9 産業」後半（政策づくり）、⑧まとめ・2年のプロジェクト選択に向けて、という学習内容の流れを再検討した。新学科の生徒が3学年そろそろ令和9年度には、1年生が「清水学際Ⅰ」の学習内容を発表、2年生が「清水学際Ⅱ」の学習内容を発表、3年生が総合的な探究の時間の内容と「清水学際Ⅲ」で英語での発表、という4回の発表の機会を設定することも確認した。

また、前回から継続している評価方法についても議論した。1年間の評価をつける

際、各領域の担当がつける評価を平均する方法や、領域ごとに評価をする観点を決めたり、どの時間にどの観点を見取るのかを決めておいたりする方法が考えられることなどを協議した。

(7) 第7回ワーキンググループミーティング

○日時：令和6年11月5日（火）16:00～

○主な協議題

「清水学際Ⅰ」の評価に関する検討事項及び各科目で今後検討する内容を確認した。評価については、観点別評価や数値による評価にするのか、文章記述にするのかを次回をめぐりに決定することとした。

(8) 第8回ワーキンググループミーティング

○日時：令和6年12月4日（水）14:00～

○主な協議題

協議継続中であった「清水学際Ⅰ」の評価について、それぞれの評価方法について整理した。領域によってペーパーテストを実施することが適する場合と適さない場合があるが、評定でも文章記述でもどちらでも対応できるだろうという意見や、どういった評価の方法をとったとしても、定期的に生徒にフィードバックできるような運用を考えていくことが重要で、特に生徒との個別の面談が効果的ではないか、という意見が出された。また、「清水学際Ⅱ・Ⅲ」では、生徒に「自分の目標」を考えさせて、教員と合意形成していくこともできるのでは、という意見もあった。最終的に、「清水学際Ⅰ」では、生徒の活動を細かくフィードバックするため、文章での評価とすることとし、「清水学際Ⅱ・Ⅲ」では、活動内容が数値での評価にそぐわないため、文章での評価とすることとした。

また、3学期にかけて「清水学際Ⅰ」で使用するテキストを検討していくことについても確認した。

(9) 第9回ワーキンググループミーティング

○日時：令和7年1月29日（水）16:00～

○主な協議題

今年度中に取り組むべきことを整理し、2月と3月のミーティングで協議することを確認した。「清水学際Ⅰ」については、担当者が主体となって2月に学習内容や外部講師の選定などを含めた年間計画を作成し、3月のミーティングで協議することとした。「清水学際Ⅱ」については、2月のミーティングで今一度プロジェクトの内容について整理することとした。

V 実践報告Ⅱ「1年生総合的な探究の時間 活動報告」

1 目標

探究における思考法、手法等について理解を深め、地域の課題について探究を行う。

2 年間の活動内容

別紙1参照

3 具体的な取組活動

(1) 1学期の取組

高知大学を訪問して「探究活動とはどのようなものか」や「問いを持つこと」について体験的に学習した後、探究学習のサイクルや手法を学んだ。その後、地域の魅力や課題を考える活動において「陸」と「海」の2つの分野について、その現状を知る機会として、外部講師を招聘した。1学期は「陸」の分野について講師から講話をしていただいた。詳細を以下に記す。

○外部講師講話

目的：土佐清水市の現状や課題等について、各分野の担当者や取組を推進している方から直接話を聞くことで、その実際を知る。また、聞いた内容をもとに新たな問いを立てたり、自分にできることを考えたりする機会とする。

日程及び講師 講話①

令和6年6月17日(月) 7限 総合的な探究の時間

15:30～16:05 「清水は自然が豊か？豊かさとは？」

講師：環境省土佐清水保護管事務所 小林皆登氏

16:05～16:15 質疑応答

16:15～16:20 生徒振り返り

日程及び講師 講話②

令和6年6月24日(月) 7限 総合的な探究の時間

15:30～16:05 「豊かさを守るために大切なこと」

講師：環境省土佐清水保護管事務所 小林皆登氏

16:05～16:15 質疑応答

16:15～16:20 生徒振り返り

生徒の振り返りより(原文ママ)

ア【講話①を聞いて、新たに発見したこと】

- ・以前は「人の手が加えられていない状態」が“自然豊か”だと思っていたけど、人の手が加えられていることで生態系が守られていたり、その場所自体を守ることができているということを知りました。
 - ・豊かな自然には原生自然、二次的自然があることを知りました。自分たちの生活は常に自然と関わり合っているということに改めて気づくことができました。周りにある自然を大切に守り続けていけるようにしたいと思いました。
- #### 【講話①を聞いて、疑問に思ったこと】
- ・人の手が加えられすぎると逆に自然というものにどのような影響がでるのか。
 - ・もし1つの生物が絶滅してしまったとして、代用ができない生物はどれくらいいるのか。
 - ・陸の自然と海の自然は変化の仕方が違っているのはなぜか。

イ【講話②を聞いて、新たに発見したこと】

- ・清水は沖縄や他の県に比べて、海が綺麗で魚もおいしいということが知れたし、他にはない唯一清水が持っている魅力だから、これからも守り続けていきたいと

思いました。

- 自然を守るための大事な行動5つ（味わう、ふれる、伝える、守る、選ぶ）を少しずつ実践していくことで、少しでも変えていけることがあると思うので、日常生活の中で意識して行動していきたいと思いました。
- 改めて清水はきれいな場所だと実感しました。人の手が加わっていない訳ではないけど、人の手によって守られてきた自然が清水にはたくさんあるとわかりました。

【講話②を聞いて、疑問に思ったこと】

- 海の生き物の中でサンゴのように、温度が上昇することに対応できない生物はおよそどれくらいの割合でいるのか。
- 自然の中で生きることで、なぜストレスが改善されたり、がんを攻撃する物質が強化されるのか。
- 環境が変化することで生物が適応するにはどれくらいの期間が必要なのか。

高知大訪問学習の様子



「陸」分野の外部講師講話の様子



(2) 2学期の取組

1学期の「陸」の外部講師講話に引き続き、「海」の分野における地域の魅力や課題、現状について外部講師講話をしていただいた。その後「陸」と「海」の講話を聞き、生徒たちの疑問や興味をもとに13班に分かれてそれぞれのテーマに沿って探究活動に取り組んだ。

○外部講師講話

目的：土佐清水市の現状や課題等について、各分野の担当者や取組を推進している方から直接話を聞くことで、その実際を知る。また、聞いた内容をもとに新たな問いを立てたり、自分にできることを考えたりする機会とする。

日程及び講師 講話①

令和6年9月9日（月）7限 総合的な探究の時間

15:30～16:05 「土佐清水の漁業の現状と問題①」

講師：高知県水産振興部土佐清水漁業指導所 渡邊 実紗 氏

16:05～16:15 質疑応答

16:15～16:20 生徒振り返り

日程及び講師 講話②

令和6年9月30日（月）7限 総合的な探究の時間

15:30～16:05 「土佐清水の漁業の現状と問題②」

講師：高知県水産振興部土佐清水漁業指導所 石川 徹 氏

16:05～16:15 質疑応答

16:15～16:20 生徒振り返り

生徒の振り返りより（原文ママ）

ア【講話①を聞いて、新たに発見したこと】

- ・清水は魚が有名なのに、なんでとれる量が少なくなっているんだろうと思ったけど、高齢化とか海の変化とかサメなど問題があるんだなあと思いました。
- ・清水は黒潮のそばにあるから好漁場であるらしくて、それが清水の素敵な魅力だと思いました。

【講話①を聞いて、疑問に思ったこと】

- ・魚にとっての1度の海水温の変化って人にとってどれくらいか。
- ・ちょっと暖かい海が好きな魚が気候変動により、土佐清水市でとれやすくなったという話があったけど、すごく暖かい海が好きな魚がとれやすくなるというのはないのか。
- ・サメが増えて魚が減っているのか。それならなぜサメが増えているのでしょうか。

イ【講話②を聞いて、新たに発見したこと】

- ・サメが増えているわけではなく、目立っているだけということを知りました。「駆除すればいい」と言っているけど、たくさん方法があっぴびっくりしました。有効な方法を思いつけばいいなと思いました。
- ・サメは増えているわけではない、サメは絶滅が危惧されている種類が多い。
- ・サメのさらなる可能性がみえた回でした。サメは自分たちにとって危険で怖い存在ですが、仲良く共生できる未来もあるのかなと思いました。
- ・サメも生きるために魚を食べているわけなので、サメを駆除するのはあまり気が進みません。せめて、忌避という形でサメが来ないようにする方がよいと思います。

【講話②を聞いて、疑問に思ったこと】

- ・サメの被害で一番多かった（食べられた）魚は何ですか。
- ・サメの種類によって駆除のしやすさや対策の効果に違いはあるか。
- ・サメをおいしく食べられる方法はないか。

「海」分野の外部講師講話の様子



探究テーマ一覧

班	人数	テーマ	班	人数	テーマ
1	3	サメの部位別の有効活用	8	3	種の保存
2	3	サメの有効活用	9	3	生物多様性
3	4	海洋環境の美化	10	4	サメ被害対策
4	3	海洋環境の変化	11	3	有効なサメ被害対策
5	4	サメの調理	12	3	空気のおいしさと健康
6	3	漁獲量の減少	13	3	自然と人の関わり
7	3	オニヒトデ対策			

(3) 3学期の取組

2月上旬に学年発表会を実施予定である。学年発表会後には、クラスメイトや、参観していた教員及び地域コーディネーターからのコメントをもとに、2月下旬の校内発表会で発表するグループを選出する予定である。

学年発表会のスライド< 9班 生物多様性 >

生物多様性の重要性を知り、種の保存に貢献する

足摺のツバキを残していくために私たちができることは？

この問いを選んだ理由
土佐清水市の特色であるものをテーマに探究しようと考えたところ、私たちが幼い頃から身近にあるツバキが思いついたから。

仮説
ツバキの保全活動を広めていくことが必要ではないか？



この活動が始まった経緯

ツバキの衰退を止めるため!!!!

結論

今後のツバキは、人が手を加えるか加えないかで増減が変わる。
だから、これから私たちが森に手を入れることでツバキが育つ。
そのためには、ツバキの保全活動を広めていくことが必要であると言える。



根拠 I

ツバキの天敵 **メダケの大量発生**
ツバキが侵食される



<対策>

- 地域の学校や人々で調理して食す
- メダケの一本釣りなど

(メダケの茎部分を竿代わりにし、釣りをする)



1足摺小学校のみなさん いい笑顔です

根拠 II

ツバキの特徴



日陰を好む
成長が遅い

先が長い
長い間人が関わり続ける必要がある

活動を受け継いでくれる人が必要!!

根拠 III

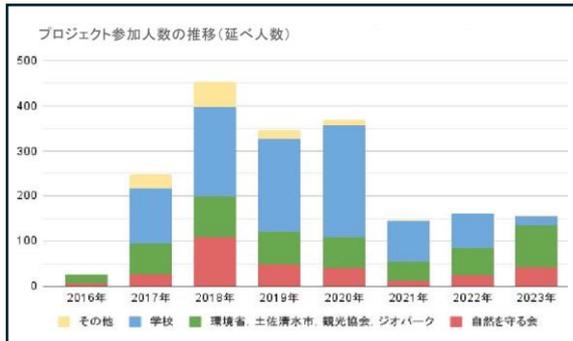
ツバキの保全活動に参加している方の **高齢化**

若い方があるとさらにいいな

主に、自然を守る会やママさんバレー-TSUBAKIの方がこの活動に参加してくれているが年齢層が高い。

…ツバキは成長速度が遅くて普段は草を抜いたりする地道な作業がメインだからあまり参加してくれないのかな。

でも、日々モニタリングをしていく中で少しずつだけどツバキの成長を感じられたときはやりがいを感じるよ。

ふるさと納税 はじめました

土佐清水市のふるさと納税では、ツバキの苗と絵馬をセットにした返礼品をご用意しています。



天然椿使用 食用 純度100%
あしずり 椿オイル

気づき・今後の課題

気づき
今後どのように人が関わっていくか次第で椿が残るか減るかは変わる

これから人も関わり続ける必要がある!!

今後の課題
・より多くの人に関わってもらうためには…?



https://www.kasutaku.com/GC1738/bisa_post_83.html

参考文献



< 5班 サメの調理 >

**サメを美味しく食べるには
どのように調理したら良いのだろう**



この問いにした理由

今土佐清水市ではサメを食べる習慣が一部でしかないのでサメが獲れても捨てるしか選択肢がないのが現状…

このままサメを捨て続けるのはもったいない!!!

サメを美味しく食べられるようにできればいいのでは?

サメ肉の特徴



ささみのような淡白で肉質が柔らかくさっぱりとした味わいが特徴!

しかし臭みがあるためそのまま焼いて食べるのは難しい…

仮説

美味しくできる味付けのレパートリーが少ない。

境先生はサメ肉は美味しくないと発言した
石川さんは甘酢で味付けをすると美味しいと言っていた

味付けによってサメ肉の感じ方が変わるのでは?



美味しくするコツ



石川さんからアドバイスをいただきました！

- ・濃い味付けをするといい！例えば甘酢など
- ・刺し身にしても美味しい！

(今回は冷凍したものを使ったため刺し身にはできませんでした。)



さっと煮

風味	見た目
ふわっと魚を感じる	普通の魚
食感	匂い
脂がのってとろける感じ	全く気にならない



味付けはシンプルに醤油と砂糖とお酢だけでした。
そのおかげでサメのだしが出てとても美味しかったです。
調理時間約1時間 ※大根は弘田家産



さっと煮



フライ



フライ

風味	見た目
一般的なアジフライと変わらない	白身魚
食感	匂い
ふわふわした感じでジューシー	全然臭くない



調味料を持ってくると忘れて下味は付けられなかったんですが素の味でも十分美味しかったです！！ 調理時間約30分

甘酢あんかけを
かけたらvery good!



食べてくれた方の感想



Mちゃん なんがジューシー！ふわふわしてる。

Nちゃん うまいです

小島先生 思ったんと違う！全然癖がない。うまい。ピールが楽しくなる！！

山村先生 ん～おいCooooooooo!

M家族 フライ下味ついてないけどおいしい

Y家族 6さいの妹は「これチキン？うますぎ！！」ほかの家族は食べてくれませんでした 😞

結論

実際に食べてみたらすごく美味しく、臭み・癖もなくて食べやすかったです。臭みがなかった理由として、今回は土佐清水市で獲れたサメが手に入らず、はじめから小さくカットされた冷凍したものを使ったからではないかと考えました。



今後の課題



今回は時間がなくて2つの料理しか作れなかったけど石川さんにおすすめされた酢豚風のサメ料理や他の料理も作ってみたいと思いました！

これからサメ料理を土佐清水市のご飯屋さんで取り入れてもらってサメ料理を広めたいと思いました。

今回使ったサメは取り寄せた冷凍のもので、実際のサメの臭いとは異なるかもしれないので清水で捕れるサメを使った料理をしたいと思いました。

4 成果と課題

地域の現状や課題などを聞く機会を得たことや、自分たちで考えたテーマで探究活動を進めていく中で、地域についての理解が進んだ。また、「陸」と「海」の講話でそれぞれ事前学習の時間を設定することで、これまでに学んだことや予備知識を振り返ることができ、講話内容をより深く理解できた。事後学習では講話内容をまとめ、グループワークを交えながら生徒それぞれの興味関心を探る時間を設けた。課題は、深めていきたい問いを設定した後のグループワークの時間を多く設けることができなかつたことである。情報収集では複数の情報を比較したり、併用したりするなどの時間的猶予がなく、1つの情報収集手段での活動になった。また、1学期に「陸」の分野の学習を、2学期に「海」の分野の学習を設定したため、生徒たちがテーマ設定をするときは、直前に学習をした「海」分野の記憶が新しく、設定するテーマが「海」の分野に偏ってしまった。テーマ設定の前に、「陸」の学習も振り返る時間を設けるべきであった。2年次は、この1年間の学びを活かして探究活動を深めていけるよう、生徒も担当教員も振り返りを行い次年度に引き継ぎたい。

年間の活動内容

		日付	内容	備考
1 学期	1	4月15日	オリエンテーション	「探究とは？」
	2	4月22日	高知大訪問 事前学習	なぜ探究を学ぶのか、探究によって身に付けることのできる力を理解する
	3	4月26日	高知大学訪問	高知大学：講義「探究とは何か。なぜ探究が必要なのか」
	4	5月13日	訪問学習振り返り・探究学習の進め方	・4/26 訪問学習振り返りの共有 ・問いの立て方
	5	6月3日	探究学習の進め方	情報収集の方法
	6	6月10日	事前学習（陸）	地域の陸の産業について知る
	7	6月17日	陸の豊かさを守ろう 【外部講師講話①】	環境省保護官 小林氏 「清水は自然が豊か？豊かさとは？」
	8	6月24日	陸の豊かさを守ろう 【外部講師講話②】	環境省保護官 小林氏 「豊かさを守るために大切なこと」
	9	7月1日	事後学習（陸）	講話内容のまとめ、疑問に感じたこと
	10	7月18日	1学期振り返り	・1学期の振り返り ・夏休みに向けて
2 学期	11	9月2日	事前学習（海）	高知県の漁業の特色を知る 各地域の漁業法や漁獲量を調べる
	12	9月9日	海の豊かさを守ろう 【外部講師講話①】	土佐清水漁業指導所 渡邊氏 「土佐清水の漁業の現状と問題①」
	13	9月30日	海の豊かさを守ろう 【外部講師講話②】	土佐清水漁業指導所 石川氏 「土佐清水の漁業の現状と問題②」
	14	10月7日	事後学習（海）	講話内容のまとめ、疑問に感じたこと
	15	10月21日	問いの設定	・グループで問い、仮説の設定
	16	10月28日	情報収集	・グループ別活動
	17	11月11日	情報収集	・グループ別活動
	18	11月18日	情報収集	・グループ別活動
	19	11月25日	情報収集	・グループ別活動
3 学期	20	12月9日	整理・分析	・情報収集した内容をまとめる
	21	1月20日	発表資料作成	・発表用スライド作成（盛り込むべき内容や流れは生徒に考えさせる）
	22	1月27日	発表資料作成	
	23	2月3日	学年発表 (1班5分、質疑応答2～3分)	・グループごとに発表・聞き手のフィードバックはgoogle formで回答させる
	24	2月10日		・自分たちの発表の振り返りの記入
	25	2月20日	探究発表会	
	26	3月12日	2年次に向けて	

VI 実践報告Ⅲ「2年生総合的な探究の時間 活動報告」

1 目標

第1 目標

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

(高等学校学習指導要領(平成30年告示)より引用)

各学校において定める総合的な探究の時間の目標

1年次において探究の基礎、手法を学び、身近な課題を見つけ探究を行う。そのうえで地域、日本、世界と視野を広げて探究課題を設定する。2年次には1年次に設定した課題に対して、学んできた探究手法を用いて実践し、発信する。3年次にはこれまで探究したことを活かして自らの進路を考え、その実現に向けた主体的な活動を行う。

以上の取組を通じて、様々な困難に対し自ら克服できるような社会性や人間力を養い、将来地域の核となり、土佐清水のみならず社会全体を支えていける、確かな学力と豊かな社会性を持った人物を育成する事を目標とする。

上記学習指導要領の目標および各学校において定める総合的な探究の時間の目標をもとに、前年度の反省を踏まえ以下のように学年団独自に生徒に身に付けさせたい目標を具体化・整理した。

知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力
課題発見力 日常生活から学問的な問いや社会的な課題を引き出すことができる。	批判的思考力 情報を鵜呑みにせず、自分で考える力が身に付いている。	貫徹精神 自らを俯瞰的に眺めながら、最後まで考え続けている。
科学的な思考方法 適切な問い、仮説、検証を設定することができる。	多角的・客観的内省 科学的な根拠や視点をもって自らの探究活動(判断)を内省的に捉え返すことができる。	他者との協働 敬意をもって他者を受容しながら協働できる。
調べ学習と探究活動の違いを理解できている。	論理的表現力 探究したことを視覚的に構造化して発表資料に落とし込むことができる。	当事者意識 地域・社会の構成員としての自覚を持ち、地域・社会に貢献しようとしている。
領域分野に関する知識・概念形成 自分が探究した領域・分野に関する知識を概念として形成できている。	事実の羅列ではなく、因果関係や理由と根拠などを意識した原稿を作成することができる。	

3 年間の活動内容（資料1参照）

4 具体的な取組活動

(1) 1学期の取組

1学期においては、前年度の活動を振り返り、探究活動のサイクルを再確認した上で、各自が興味を持つ分野について調査を実施した。先行研究を参照し、関連する知識を深めるとともに、新たな問いを設定し、その内容を段階的にブラッシュアップする取り組みを進めた。なお、問いの設定に課題を抱える生徒に対しては、教員との個別面談を実施し、適切な助言を行った。

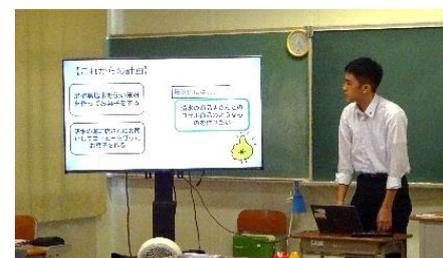
設定した問いに基づき仮説を立て、これからの探究計画を立案した。その際、企画書を作成することで各自の活動方針と計画を明確化した。さらに、探究の問いおよび仮説が具体化した段階で、本校の地域コーディネーターである二宮真弓氏に協力を依頼し、生徒の探究テーマに関連する地域の方々を選定していただいた。夏休みには、選定いただいた地域の方々へのインタビューや現地調査といったフィールドワークを実施し、現地で得た知見を探究活動に反映させた。



(2) 2学期の取組

10月には、1学期に立てた探究計画と夏休みを実施したフィールドワークをもとに中間発表を行った。この発表では、それぞれの探究活動を共有し質疑応答に対応する中で、物事を多角的に捉える視点を養い、新たな問いを見出すとともに、探究の方向性を見直す機会とした。

中間発表で明らかになった課題を基に、さらなる調査分析を進めた。そして、2学期末からは年度末に行う学年発表会に向けて、データを構造的に整理することを重視しながら、発表資料（Google スライド）の作成に取り組んだ。



(3) 3学期の取組

1月の学年発表会において代表選考を行い、2月に代表者による校内発表会を行う。学年発表では全21テーマから本校管理職による推薦1、本校地域コーディネーターによる推薦1、学年団教員による推薦1、生徒投票による選考1の合計4テーマを代表として選考する予定である。

（生徒の課題設定・学年末発表の発表タイトル/探究の問いについては資料2参照）

5 成果と課題

今年度の探究活動では、生徒自身の興味や関心を出発点としてテーマを設定したことで、前年度以上に高いモチベーションを持って取り組む姿が見られた。また、探究のプロセスにおいては、本校の地域コーディネーターである二宮真弓氏から地域の方々を紹介していただいたことで、外部との連携が円滑に進み、地域の方々からの刺激を受けた生徒たちの活動は一層活発化した。

2学期初頭に中間発表会を実施したことは、アウトプットの場を通して探究の方向性を見直す機会となっただけでなく、情報を効果的に発信するスキルの向上にもつながった。

一方で、解決すべき課題も明らかになった。外部との連携が構築できない生徒や、探究計画の作成が思うように進まず、活動の初動が遅れた生徒については、方向性の調整が難航し、満足いく結果を得られないケースもあった。また、「社会に貢献する」という目的意識を強く持つあまり慎重になりすぎて、テーマ設定に苦戦する生徒がいたことも課題の一つである。さらに、主体的に活動し続けた生徒と、モチベーションを保てず苦戦した生徒との間で成果に差が生じたことも見過ごせない点である。こうした課題の背景には、以下の要因があると考えられる。

- ・探究活動のゴールイメージを共有する場が不十分であったこと
- ・効果的な調査方法を明示できなかったこと
- ・「探究を通じて地域や社会をより良くできる」という実感を生徒に持たせることが十分でなかったこと

今後の取り組みとしては、探究の問いを設定した後にゴールイメージを共有する機会を充実させることが必要である。また、総合的な探究の時間だけでなく、日常的な教育活動の中で、生徒が「社会の一員として主体的に関わる」意識を育むことが重要であると考えられる。加えて、外部との連携をより継続的に行うとともに、過年度の探究活動の成果や経験を生徒・教員が共有し蓄積できる仕組みを構築することが求められると感じた。総合的な探究の時間の運用方法を組織的に整えることで、生徒全員が主体的に探究活動に取り組み、より深い学びを得られる環境を目指していきたい。

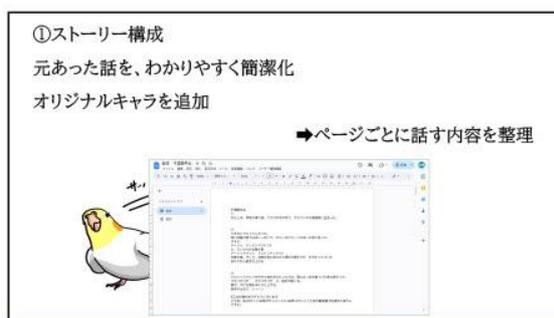
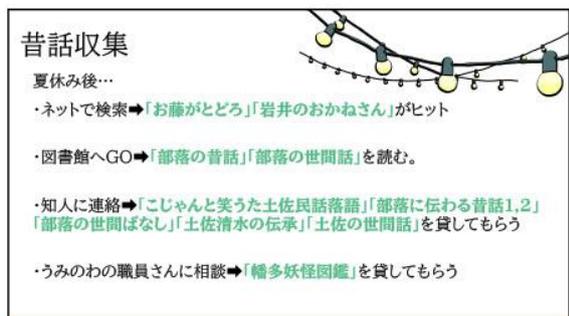
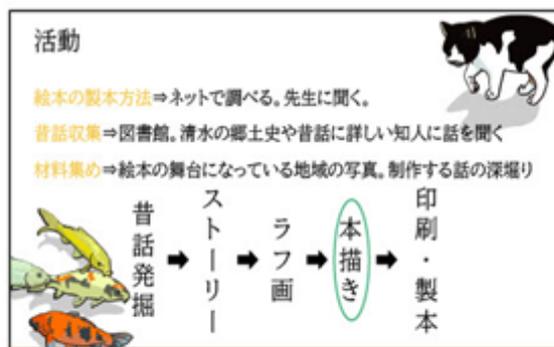
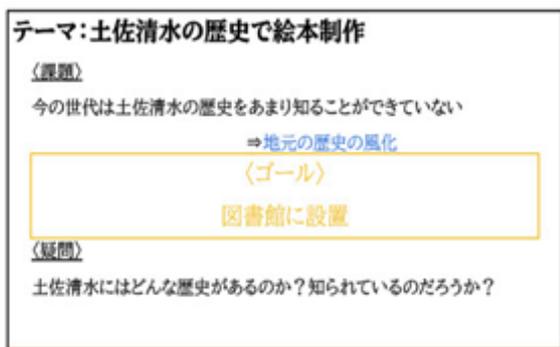
【生徒の成果物と展示の様子】

フォトラリーで観光発信『高校生が選んだおすすめの観光地』



生徒の学年末発表資料①

『地元の昔話で絵本作成』(一部抜粋)



<p>土佐清水市の人口増加に向けて</p> <p>2年AH</p>	<p>このテーマを選んだ理由（土佐清水市の人口増加に向けて）</p> <p>清水に関わる内容で探究したい</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>土佐清水市の課題「人口が減少している」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>解決につながることを考えたい</p>
--	--

<p>問：どういふ取り組みをすれば人口を増やせるか</p> <p>仮説：清水の魅力を広めれば増えるのではないかと (移住者を増やす)</p>	<p>夏休みの活動</p> <ol style="list-style-type: none"> ①清水市役所へフィールドワーク ②大川村の情報集め ③清水と大川村の比較
--	--

  	<p>分かったこと（土佐清水）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 25組（36人） ・ 年々増加傾向⇒去年より10組増加 ・ 30代が多い ・ 仕事紹介、住まいの提供、子育て支援、補助金
---	---

<p>分かったこと（大川村）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 20~30代が多い ・ 移住体験⇒目や肌で感じてもらう ・ ミッション⇒地域の人たちと関わる ・ 働く場所を増やす (はちきん地鶏、黒牛などの畜産業) 	<p>比較・比較後の活動</p> <p style="text-align: center;">30代が多い 仕事、住まいの提供</p> <p>移住年代や取り組みも大差はなかった</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>清水の魅力を集めたサイト作り</p>
--	--

年間の活動内容

		日付	内容
1 学期	1	4月15日	昨年度の振り返り、テーマ設定、問いについて
	2	4月22日	課題設定①（論文検索、探究テーマについて）
	3	5月13日	課題設定②（教員との面談）
	4	6月3日	課題設定③（教員との面談）
	5	6月10日	企画書作成①
	6	6月17日	企画書作成②
	7	6月24日	企画書作成③
	8	7月1日	夏休みの計画作成①
	9	7月18日	夏休みの計画作成②
	10	夏休み	フィールドワーク・調査・実験
2 学期	11	9月2日	夏休み活動報告・中間発表準備①
	12	9月9日	中間発表準備②
	13	9月30日	中間発表準備③
	14	10月7日	中間発表①
	15	10月21日	中間発表②
	16	10月28日	中間発表③・振り返り
	17	11月11日	追加の調査・検討①（計画）
	18	11月18日	追加の調査・検討②（修正）
	19	11月25日	追加の調査・検討③（実践）
3 学期	20	12月9日	追加の調査・検討④（実践）・学年末発表準備
	21	冬休み	フィールドワーク・調査・実験・学年末発表準備
	22	1月20日	学年末発表①
	23	2月3日	学年末発表②
	24	2月10日	学年末発表③
	25	2月20日	探究成果発表会
	26	3月	1年間の振り返り

生徒の課題設定・学年末発表の発表タイトル/探究の問い（仮説）

	発表タイトル	探究の問い（仮説）
1	AI と医療	将来の医療界に AI がどのように関わってくるのか
2	写真で地域おこし	観光写真にはどのような写真が適切なのか
3	ゲーム依存症について	ゲーム依存症を解決するためには
4	美容とジェンダーの関わり	男性がメイクをすることに違和感を抱く人は少ないが、実際にメイクをしている人が少ないのはなぜか
5	昆虫食について	なぜ昆虫食は普及しないのか
6	写真とイラストで観光発信	工夫したイラストはどれくらい人の目にとまるのか
7	土佐清水市の歴史で絵本作成	絵本を用いることで地元に興味を持ってもらえるのではないか
8	ノンバーバルコミュニケーションについて	言葉がなくてもうまくコミュニケーションをとれるのか
9	美容と心理学	美容行為が心理や行動にどんな影響を与えるのか
10	みやむら 活性化	Instagram を活用することでお店に来てくれる人が増えるのではないか
11	円滑なコミュニケーションを図るには	緊張せずに他者とコミュニケーションを図れるようになるためには
12	AI とこれからの世の中	元々あったものが現代技術によって衰退し、必要なくなることは仕方ないのではないか
13	土佐清水市の人口増加に向けて	どういう取り組みをすれば人口を増やせるのか
14	特産品を使ってお菓子作り	観光客に興味を持ってもらうためにはどうすればよいか
15	趣味とお金の関わり	趣味にお金をかけることについてどう思っているか
16	UD を活用したみんなが楽しめる水族館	誰もが魚について楽しんで学べる場所になるために必要なこととは
17	進路の決め方	自分に合った進路の決め方とは
18	生活とお弁当	食に関する職業に必要なこととは
19	高く跳べるようになりたい	好きなことと向き合うこと、まだまだ挑戦している途中
20	理想のリーダーになるためには	どうすればみんなを支え、引っ張っていけるのか
21	誰もが安心して楽しめるユニバーサルデザイン	ユニバーサルデザインを考えることで安心した施設を提供できるのではないか

Ⅶ 実践報告Ⅳ「3年生総合的な探究の時間 活動報告」

1 目標

2年次までの探究の成果を論文としてまとめる活動や、進路実現に向けた活動を通して、自らの学びを知識として概念化したり、批判的思考力・論理的表現力等を身に付けたりする。この目標をもとに、生徒には「具体的な姿」として以下のように示した（一部抜粋）。

観点	身につけたいこと	具体的な姿
知識技能	文章表現に関する知識	<ul style="list-style-type: none"> 論文の構成や引用の方法、要約の方法が分かっている。 面接における話し言葉のルールが分かっている。
	探究内容に関する知識	<ul style="list-style-type: none"> 探究のプロセスで得た情報や考えたことを他の場面でも使える「知識」として獲得している。 探究活動を有意義なものとして捉えている。
思考判断表現	論理的に表現する力	<ul style="list-style-type: none"> 一貫性のある内容を書く／話すことができている。 文章の無駄なところと必要なところを判断して表現に活かしている。
	批判的に思考する力	<ul style="list-style-type: none"> 主張や根拠の妥当性を判断することができている。 読んだものや聞いたことに対して、それをさらに深める問いを持つことができている。
	客観的に分析する力	<ul style="list-style-type: none"> 収集した情報からどのようなことが言えるかが分かったり、課題を見出したりすることができている。 データを適切な種類のグラフや表で表すことができている。
主体的に学習に取り組む態度	やり抜こうとする姿勢	<ul style="list-style-type: none"> 最後まであきらめずに自律的に取り組むことができている。 自分で論文執筆や面接練習の進捗管理ができている。
	自分事にしようとする姿勢	<ul style="list-style-type: none"> 探究したことを地域や社会でどう活かすことができるか考えている。 他の人の面接練習に積極的に協力している。

2 年間の活動内容

1学期は論文執筆の作法について学びながら2年次までの探究内容を研究論文としてまとめる活動に取り組み、2・3学期は進路実現に向けた活動として面接練習に取り組んだ後、その活動内容や3年間の進路活動等を資料にまとめて発表する活動に取り組んだ。詳細は資料1参照。

3 具体的な取組活動

(1) 研究論文執筆（1学期）

年度当初は、2年次の活動を振り返りながら、問い・仮説・検証・結果を文章にまとめ直すことで、研究論文の基礎を作る作業を行った。続いて、研究論文の基本的な構成や引用の仕方について学習した。その際、探究活動の過程で参照した学術論文だけでなく、高知県電子図書館に掲載されている高知県内の高校生の論文や、教員の大学時代の卒業論文集等を参考にした。教員や同年代・同地域の高校生という身近な存在の論文を参考にすることは、研究論文執筆の動機付けとしても有効に作用した。



執筆の際の授業は、前半 15 分程度でタイトルの付け方や要約の仕方等の説明を行い、後半の時間で各自論文執筆に取り組むという流れで行った。執筆に際しては、3 年生 48 名を学年団の教員 6 名で 1 人当たり 8 名の生徒を担当し、適宜助言や添削を行う形で進めた。

(2) 進路探究 (2・3 学期)

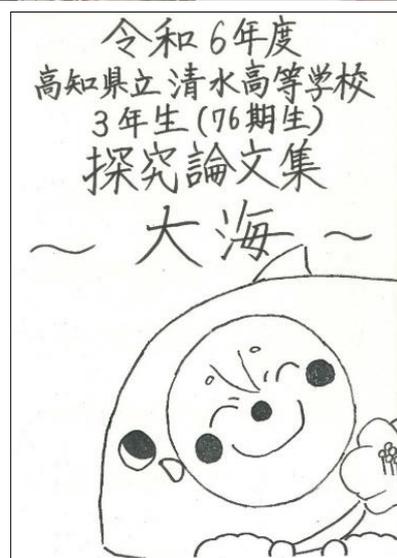
2 学期は「進路探究」として、進路実現に向けた活動として面接練習を行った。面接シートの作成から実際の面接練習までを、課外の自主的な活動と並行しながら行った。授業では面接される側だけでなく、面接する側を体験することも取り入れた。面接官を体験することで、聞き取った内容を自分の中で再構成する力や、それをもとに質問する力の育成を図った。また、面接官役を行うことは、早期に受験が終了した生徒の役割としても機能した。

11 月以降は受験が終わった生徒から順次、「進路探究のまとめ」として、高校 3 年間で「進路」を切り口にして振り返り、発表用の資料にまとめる活動に入った。その際、3 年間の振り返りに加え、「どのような大人になりたいか?」という問いを提示し、自身の将来についても語らせることとした。計 3 時間を資料作成の授業とし、12 月に 6 教室に分かれて発表を行った。



(3) 成果物

- ア 執筆した研究論文は全てをまとめて研究論文集として製本し、生徒の他、関係各所へ配付した。
(資料 2, 3)
- イ 公開をすることを許可した生徒の研究論文は、高知県電子図書館に掲載した。現在 18 名の研究論文がインターネット上で公開されている。
- ウ 進路探究のまとめは Google スライドで作成した。発表時間は 5 分程度、資料のデザインや形式等は自由とした。(資料 4)



4 成果と課題

(1) 成果

- ・研究論文執筆は、2 年次の探究活動を丁寧に言語化することにつながった。その過程で検証結果から新たな視点を見出せたり、考察をさらに深められたりなど、探究活動を深化させる時間にする事ができた。
- ・研究論文集の作成や配付、高知県電子図書館への掲載など、成果物を校外に示せたことで生徒に達成感を味わわせる事ができた。また、来年度以降の 3 年次の生徒が参照できるようになったことも、その成果である。
- ・進路探究は本校で継続的に行ってきた実践である。この取り組みは、本来個人で行う面接練習を授業時間に行うことで、生徒同士が協働的に学ぶ時間にすると同時に、練習し合うことで、お互いのことをより深く知る時間にもなっている。

(2) 課題

- ・研究論文の構成や引用・参考文献の示し方については指導を徹底することができず、生徒間で仕上がりにばらつきが出てしまった。特に、引用・参考文献の示し方については、1・2 年次に国語科の授業での既習事項であったにもかかわらず、規定通りに書くことができなかった生徒が散見されたため、指導方法を大幅に改善する必要がある。

- ・生徒が研究論文執筆に使用した Google ドキュメントは段組み等の調整ができないため、誤字脱字の確認等をさせることしかできず、ほとんどの校正作業を教員が行うことになってしまった。またその結果、研究論文集完成の時期が遅れ、生徒への配付が1月の最後の授業となった。
- ・進路探究のまとめは、年間計画の都合上、発表を1時間分しか確保することができず、各教室8名ずつでの発表となった。もう少し規模を大きくして、より多くの人に向けて発表できる機会を作ることができれば、教育的効果も高まったのではないかと考える。

資料1

年間活動計画

	日付	内 容	備考	
1 学 期	1	4月15日	オリエンテーション	
	2	4月22日	問い・仮説・検証のまとめ直し	担当決定
	3	5月13日	根拠の示し方（検証方法・内容の文章化）	
	4	6月3日	データの示し方 （検証結果・考察の文章化①）	
	5	6月10日	参考・引用文献の示し方 （検証結果・考察の文章化②）	
	6	6月17日	論文執筆①良いタイトルとは？	完成した者は担当に 提出→添削
	7	6月24日	論文執筆②要約の方法、レイアウト	
	8	7月1日	論文執筆③一次提出	
	9	7月18日	論文執筆④最終提出	未完成の場合は夏休 み中に執筆
2 学 期	10	9月2日	進路探究①オリエンテーション	6グループになるよ うに進路希望別に分 かれる
	11	9月9日	進路探究②面接シートの作成	
	12	9月30日	進路探究③面接シートの作成	
	13	10月7日	進路探究④面接練習	
	14	10月21日	進路探究⑤面接官をやってみよう	
	15	10月28日	進路探究⑥面接官をやってみよう	
	16	11月11日	進路探究のまとめ①	スライドで作成
	17	11月18日	進路探究のまとめ②	
	18	11月25日	進路探究のまとめ③	
3 学 期	19	12月9日	進路探究のまとめ発表会	
	20	1月20日	3年間の振り返り	論文集配付

令和6年度3年生論文タイトル一覧

資料2

クラス	氏名	論文タイトル	ページ	指導教員
A31		孤独と向き合うために	3	坂本
B04		相手をより理解するために ～アンケート調査から わかった相互理解のポイント～	4	
A04		人と馬を繋ぐ～サラブレッドに触れて～	6	
A10		日焼け止めの研究—価格と効果は比例するのか?—	8	
A16		化粧が与える心理的影響 —人はなぜ化粧をするのか—	9	
A03		情報量と集客数～人気の観光スポットとは～	11	
A27		観光客数を増やすには —観光パンフレットにおける情報量の違い—	13	
A28		土佐清水市の観光問題 —インタビューと比較調査による考察—	15	
B01		医療的ケア児と関わる上で ～よりよい看護とはどのようなものか～	17	毛利
B07		医療的ケア児の未来を探る	19	
B08		医療的ケア児の今後 —医療的ケア児にとってより よい環境とはどのようなものか—	21	
B09		医療的ケア児のよりよい看護環境とは—病院と地域 が連携し、当事者の声を聞くことの重要性—	23	
A17		高知県の塩で新しい料理を作る	25	
A05		スイーツの流行 —SNS の影響力とグローバル化の役割—	27	
A06		終わらない流行	29	
A26		スイーツの流行に終わりはないのか	31	
A01		人を魅了する名作の法則 —“見たくなる”アニメ・マンガとは—	33	山本
A32		人を惹きつける漫画・アニメの設定とは —アンケート調査で考察—	36	
B02		唆られるアニメはどんな共通点があるのか?	39	
B15		アニメの魅力を解剖—人気の秘密に迫る—	42	
A29		何の音楽をいつどんなタイミングで聴くのか	45	
A14		窓と光と心～太陽の光は集中力に関係するのか～	47	
A25		災害時に役立つキャンプ用品と実録	49	
A30		高校生—長距離走りたがらない—なぜ?	50	

A24	少子高齢化をどう変えるのか —高校生は何を考える?—	52	桑田
A20	少子化が進む最先端の地域で考える少子高齢化の歯止め—人口減少の未来をどれだけ見据えるか—	53	
B03	土佐清水市の子どもの流出について —今、高校生は何を考えているのか—	55	
B12	土佐清水の若者流出の原因分析 —若者は何を求めているか—	57	
B13	政治に対する土佐清水市の若者の認知度と人口減少 についての考察 —政治と若者の結びつき—	59	
A07	ストーリー性が伝わる写真 ストーリーとはなにか?	62	
A19	写真と感じる思い ストーリーが伝わるとは?	63	
A22	写真の魅力について深く知る—ストーリーとは一体?	65	崎山
A02	日本アニメの影響	67	
A08	アニメから学ぶ時代の変化 ～過去と現在・アニメの規制を通じて～	69	
A11	アニメに対する偏見～アニメと世間のつながり～	71	
A21	アニメに対する偏見 ～生徒へのアンケートを添えて～	73	
A33	暴力的描写を含むアニメ視聴に対する親の規制意識 に関する調査	74	
A12	高校生のストレスへの対処法 ～清水高校生への調査からの一考察～	76	
A18	日韓呼称選択の不思議 —仲の良さの違いによって、 相手の呼び方は違ってくるのか—	78	森
A23	英語力による日韓比較 —隣国同士で生まれる差の原因とはなにか—	80	
A13	持続可能な社会を目指して ～児童虐待の世代間連鎖がもたらす影響について～	83	
B06	虐待件数の増加 —世代間連鎖はなぜ繰り返されるのか—	85	
B10	負の連鎖を断ち切るために —児童虐待の現状を知る—	87	
B11	世代間連鎖の社会的構造 ～法・制度にみる問題の帰属～	89	
B05	カッサータを通じて探る土佐清水市の柑橘類の魅力	93	
A09	ウミウシの色—326種 326色—	95	森
A15	ウミウシ—竜串の海をいろとりどりに—	96	
B14	ウミウシの驚異的世界—土佐清水市の海の生態系に 触れて—	97	

英語力による日韓比較

—隣国同士で生まれる差の原因とはなにか—

高知県立清水高等学校 3年

要旨

現代社会は徐々にグローバル化が進んでいる。しかしながら日本人は英語を苦手としている人が多い。それに比べ隣国ながら、韓国には英語が得意な人が多い。得手不得手の違いは何が原因となるのか。勉強量の違いや受験システムの違い、文化への関心などに原因があるのではないかと考え、SNSによって実際に韓国人の方にコンタクトをとり、検証を行った。その結果、勉強量の多さを上げる声が多く、その背景として韓国社会の状況が明らかとなった。

1. 研究動機（問題の背景）

現代社会では国を超えたコミュニケーションが重要視されている。多くの人と会話を通すことでコミュニケーションの幅は広がる。現在、世界共通言語として「英語」が認識されている。スイスのとある研究者によると英語を母国語にしない 113 カ国・地域のうち、日本人の英語能力は 87 位、アジア 23 カ国・地域の中では 15 位という結果が出た。更に 5 段階評価のうち、4 段階となる「低い能力レベル」と評価された。日本語と似た特性の言語を持つ韓国は 49 位であった。なぜ隣国なのにこのような差が出てしまうのだろうか。

また、近年日本では再び韓国ブームが起きている。コロナが 5 類となり外国からの観光客も増えてきた。その中でも韓国は隣国ということもあり、多くの人が日本に観光客として来日している。韓国人の旅行者の方の中には日本のアニメが好きで独学で日本語を勉強し、旅行に来る人も多い。日本語と韓国語は共通点も多く、お互い習得しやすい言語ではある。韓国では日本語学科や授業として日本語や英語以外の言語を学ぶことができる。しかし、日本の義務教育では韓国語を学ぶ機会はなく、英語のみになっている。英語が世界共通言語ということもあり、両国とも英語に力を注いでいる。しかしこのような結果になってしまっているのが現状だ。似た言語を使う韓国人のように日本人も英語がうまくなるにはどうすればいいのか。また韓国人が英語が得意な理由はなにか。を考えることで、異文化コ

ミュニケーションに役立つのではないかと考えた。

2. 目的（問いと仮説）

「なぜ韓国人には英語が得意な人が多いのか。なぜそう感じるのか。」という問いを立て、その問いから「日本と韓国での英語の学習過程（勉強量）の違い」、「塾に通う学生の量」、「留学、文化への関心」などにより得意、不得意などの差に関係あるのではないかと仮説を立てた。

3. 検証方法・内容

(1) 学習時間の日韓比較

	日本	韓国
中学	119.0 分	116.1 分
高校	73.9 分	201.7 分

日本と韓国では中学まではあまり格差はない。韓国では大学受験を控えているため、中学の時よりさらに増加する。しかし、日本は韓国の進学とは違い大学以外にも専門学校や就職など様々な選択肢が存在する。そのため受験圧力が低下し学習時間が著しく減少する。

(2) 「Maumu」を使った情報収集

10～40 代世代の男女 40 名程度に直接意見を聞いた。

《 意見 》

- ・韓国では第 1 に英語ができないと企業に就職することが難しい。
 - ・日本語にはない韓国語独特の「発音」が英語と関係あるのではないか。
 - ・勉強時間、勉強を始める年齢の違いから差が生まれるのではないか。
 - ・文化への関心や、姉妹校を通じた留学も関係あるのではないか。
- という意見があった。

(3) 勉強量が多くなる背景

①日本と韓国の選抜意識

中学までは両国とも必ずしも「受験＝競争」ではない。しかし韓国では高校生になると重要な「大学入試」が控えている。そのため更に競争心が高くなる。(藤田 2001)

②日本と韓国の選抜システム

日本は段階ごとの選抜によって、徐々にプレッシャーを解除していく。しかし、韓国は日本と違い大学入試という最終段階まで、より多くの生徒が加熱され続けたままである。また、とあるアンケートで「英語をもっと学習すれば、よりよい仕事につくことができると思う」という質問に対して非常にそう思うと答えた学生が韓国は日本の 2 倍近くの数値になっていた。また、学習意識の相違では日本人学生に比べ韓国人学生の方が長い目で見て学習目標を立てる傾向があるため英語学習を継続していく可能性が高いと考えられる。

③日本と韓国の英語の教育課程

日本と韓国ではアプローチが異なっている。日本の教材は「内容把握」、「印象に残った部分を出す」、「自分の思いを書く」というように生徒の「感動」に重きをおいた課程になっている。韓国の教材は「原因や結果」、「比較対照」、「仮定や推論」、「要旨や意図」のいずれか

に考慮したものになっており、論理的思考や学習者主導の教育方針がとられている。また、韓国の教材は日本の教材よりも内容がレベルが高く、ページ数も多くなっている。

(4) 日本人が英語が苦手な理由

①勉強量の少なさ

上述の通り日本と韓国では選抜システムの違いや教育課程の違いから韓国の方たちに比べて勉強量が少ない現状がある。

②言語的な距離

日本語と英語は文法が大きく異なっている。そのため瞬時的処理を必要とする文法的な計算や操作などが含まれ、その際の脳内処理が日本人には極めて大きなハンディになっている。また、日本人は英語が話せないからといって日常生活で困ることがないため、英語学習のモチベーションが低くなっていると考えられる。

③日本と韓国の学習意識

一般教養の科目として英語を受講する日韓の大学 1 年生を対象に各国 154 名に行ったアンケートによると「英語をもっと学習すれば、よりよい仕事に就くことができる」という質問に対して非常にそう思うと答えた人が日本は 42 名、韓国は 82 名と韓国は日本の 2 倍の数値になっていた。また、全くそう思わないと答えた人は日本は 31 名なのに対し韓国はわずか 7 名だった。その他にも「卒業後も英語を勉強し続けたい」「将来留学したいので英語を学習したい」「長期間外国で暮らしてみたい」という問題では非常にそう思う・そう思うと答えた人が日本では 93 名、62 名、75 名なのに対し韓国では、135 名、97 名、128 名と韓国の方が将来のために考えて英語を勉強しており、韓国学生の方が英語学習を継続していく可能性が高

いと考えられる。韓国は日本に比べて貿易依存が高いため企業が英語力を重視し、欧米大学への留学が就職に有利に働いているということも考えられる。

4. 検証結果・考察

実際に検証してみた結果、勉強時間や教育課程の違い、学習意識などの違いから差が生まれているということが分かった。また、その背景には選抜システムの違いや言語的な距離などが関係あると考えられる。

5. 結論・今後の展望

主に勉強時間に関係があるということは分かったが、日本人がより英語を理解しやすくするためになにかより良い具体的な勉強方法はないのか、またその時のカリキュラムはどのようなものになるのかを考える必要があると思う。また、国を超えての交流やお互いの文化を知ることでお互いを理解し、今以上に国同士や国民間での関係を更に強化することはできるのかをこれから見つけていきたいと思う。

〈参考・引用文献一覧〉

・藤田 武志 「学習時間の日韓比較 -中学生・高校生調査をもとに-」 (平成 13 年 7 月 19 日)

・藤田 武志 「日韓中学生の競争意識と選抜システム」 (平成 14 年 1 月 31 日)

・森 いづみ 「なぜ学習塾が発達するのか -日本と韓国の比較-」

・nippon.com 「日本人の英語力、非英語圏で 87 位に後退：スイスの教育機関 2023 年調査」

・長谷川 由美、吉田 佳代 「日本と韓国における大学生の英語学習意識・動機の比較研究」

2023. 11. 21

(<https://www.nippon.com/ja/japan-data/h01843/#:~:text=%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E8%AA%9E%E5%AD%A6%E6%95%99%E8%82%B2%E6%A9%9F%E9%96%A2%E3%80%8CEF,90%E4%BD%8D%EF%BC%89%E3%81%A8%E3%81%95%E3%82%8C%E3%81%9F%E3%80%82>) 2024 年 6 月 24 日閲覧

負の連鎖を断ち切るためには —児童虐待の現状を知る—

高知県立清水高等学校 3年

要旨

幼少期に虐待を受けた子どもが大人になった際、自身の子どもに虐待をするという世代間連鎖が社会問題になっている。この問題について、なぜ虐待の世代間連鎖は繰り返されてしまうのかという問いを立て、原因を推測した。子どもは親の言動を無意識に学び実行するためそれが虐待されているとも気づかず、その子どもの中で常識となってしまうことや、児童養護施設で暮らす子どもは18歳になると強制的に出ていかななくてはならないため、社会に適応できないまま孤立してしまうなど、社会の支援が充実していないことが原因だと仮説を立てた。検証として警察署や家庭児童相談室の方にお話を聞き仮説があっているのか確かめた。虐待の世代間連鎖に直結する検証はできなかったが、話を聞くことで知識と理解をより深めることができた。

1. 研究動機（問題の背景）

近年、虐待に関する事件が増えている。虐待には「身体的虐待」「心理的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」があり、配偶者に暴力を振った場合でもそれが子どものいる前で行われると子どもに対する心理的虐待になるなど、完全に分かれているわけではなく、重なっている部分も存在する。また、高齢者に対してもネグレクトに当たる「介護・世話の放棄・放任」があり、それらは広範囲に及んでいる。子どもに興味があったため、その中でも児童虐待に視点を当てて調べることにした。探究の問いを考えていた当時、幼少期に虐待を受けた子どもが大人になった際、自身の子どもに虐待をする「虐待の世代間連鎖」という言葉がニュースで大きく取り上げられていた。調べていくと、親に虐待をされて嫌な思いをしたことから、親が反面教師となり、自身の子どもに対して虐待をしない人が多い中、20～30%の割合で世代間連鎖が起きていることが分かった。そこでなぜ世代間連鎖が繰り返されるのかという問いを立て、原因を探り探究することが世代間連鎖を断ち切ることに繋がるのではないかと考えテーマを設定した。

2. 目的（問いと仮説）

なぜ世代間連鎖は繰り返されるのかという問いに対して、家庭においては子どもは

親の言動を無意識のうちに学び実行することで、それらの言動が常識となっていることが原因だと考えた。他の家庭と比較する機会がないため、虐待を受けたとしてもそれが間違っていることと認識しないまま大人になってしまうと、当たり前のように子どもにも同じことをしてしまい、その結果虐待の世代間連鎖が起ってしまう。また児童養護施設においては、原則18歳になると強制的に出ていかななくてはならないことも原因であると考えた。経済的な支援がなかったり、偏見があったりと完全に社会から孤立してしまい、負の連鎖が繰り返される。そこで、社会の支援が充実していないのではないかという仮説を立てた。関係機関からの話を聞き知識と理解を深め、世代間連鎖を断ち切るための方策を探ることを目的とした。

3. 検証方法・内容

警察署・家庭児童相談室への聞き取り調査

- (1) 実施機関 2023年8月～11月
- (2) 聞き取り内容
 - ・ 通報の基準
 - ・ 通報からの流れ
 - ・ 虐待の増加原因
 - ・ 虐待の種類
 - ・ 面前DVとは
 - ・ 土佐清水市の現状

- ・虐待をする傾向にある人の特徴
- ・被虐待児の特徴 など

4. 検証結果・考察

なぜ虐待の世代間連鎖は繰り返されるのかという問いについて、家庭においては子どもは親の言動を無意識のうちに学び実行することで、それらの間違っただ言動が常識となっているため、児童養護施設においては社会の支援が充実していないため、という仮説を立てた。警察署と家庭児童相談室に話を聞きに行き仮説があっているのか検証した。虐待をする傾向のある人や被虐待児の特徴を聞くことで、仮説通りの間違っただ言動が常識となってしまっていることや、児童養護施設を出た人に対するアフターケア不足が原因という答えを導くことができた。プライベートパーツやパーソナルスペースを理解させたり、施設を出た子どもが社会に適応できるための支援をすることが必要だと分かった。

5. 結論・今後の展望

今回の探究において、立てた仮説が正しいかどうかを、関係機関から話を聞くことで検証することはできたが、児童虐待の世代間連鎖を断ち切るための検証には至らなかった。しかし警察署や家庭児童相談室の話を聞くことで学ぶこともあった。例えば児童相談所の虐待対応件数は年々増えており一見悪いように見えるが、実際は虐待とまでいかないが些細なことでも通報する人が増えているということを表している。これは社会全体が児童や問題に対し関心を持っていることを指し、孤立させないという点から見てもいい傾向であると考え。制度をつくったり支援を行う以外にも、一人ひとりが気にかけて寄り添うことが虐待の世代間連鎖を断ち切ることに繋がるのではないだろうか。



〈参考・引用文献一覧〉

- ・山陽新聞社 (2023年09月07日 10時02分 更新) 「児童虐待、最多21万9千件 22年度、「心理的」が6割」
(<https://www.sanyonews.jp/article/1448233>) (2024年6月10日閲覧)

巻 頭 言

清水高等学校長 田中 修一

社会学者で東京大学名誉教授の上野千鶴子氏は「情報はノイズから生まれる」と著書の中で述べています。ここでいう「ノイズ」とは私たちが日常生活の中で感じる「違和感、こだわり、疑問、ひっかかり…」の類ということです。「ノイズ」は特別な場所で発生しません。いわば「日常生活」の中に潜んでいるものです。通常の生活の中で「違和感、こだわり、疑問、ひっかかり」を感じる事がなければ「ノイズ」は発生しません。そしてノイズが発生しなければ情報も生まれないということです。つまり、その情報一つ一つの根源には、何かしらの「感覚」を基とした「ノイズ」があり、それを見逃さず、対象としたところから「それが何か」、「どこから来たものか」、「なぜここにあるのか」、「これからどうなるか」等、多くの「？」に行き当たります。

今回、48名の3年生が、一人一人「？」を見つけ、約2年間という時間をかけて探究し、自分なりの結論を導き、最終的に論文という、「目に見えるかたち」でとりまとめるというかなり本格的な学習に取り組みました。つまり、それぞれが、日常生活に「ノイズ」を感じられる能力を持っていたからこそ、それを「情報」にまで到達させたということです。これは、大変有意義で価値のあることです。なぜなら、「情報」とは決して他から押し付けられるものではなく、日常生活において、鋭く感覚を研ぎ澄まし、敏感に「ノイズ」を探り当て、取り出し、いろいろな角度から見つめたり、考えたりする中で、最初はぼんやりとしか見えてなかったものを、徐々にはっきりとしたかたちあるものへと描き出した、「情報」にほかならず、みずから創り出したという生産的な営みから生み出されたものだからです。

辞書に、「探究」とは「物事の本質を見極めること」と書かれてあります。「物事の本質」など、そう易々と見極められるものではありません。それでも、私たちは、生きていくために「知り」、「考える」ことを数えきれないぐらい繰り返します。その繰り返しの過程に最も意味があり、「本質」に近づく、唯一の手段なのではないかと思えます。

「探究」とは一生の営みであり、「知り」、「考える」ことを決してあきらめない48名の将来が大変明るいものであることを頼もしく感じます。各人の努力の結晶である、今回の論文集を多くの方々に読んでもらうことを期待しています。

令和6年10月

進路探究のまとめ

3年Bホーム



目次



1. 頑張ったこと
2. 感謝したい人
3. 将来像
4. 進学先での抱負

頑張ったこと



生徒会活動

リーダーシップや責任感、協調性を身につけることができた。



保育技術検定

保育に関する専門的な知識や技術的な能力を身につけることができた。



ピアノ

集中力や忍耐力、ミスに対する分析力を身につけることができた。

感謝したい人

担任の先生

森先生 両親

氏次先生



将来像



乳児院

障害を受けられない乳幼児を養育する施設
虐待(4割)や家族の病気(2割)、経済的困窮



↓

安心感を与えられる存在でありたい



聖徳大学幼児教育専門学校

進学先での抱負

- ・乳児期の心理的、情緒的発達について学びたい
- ・周りへの配慮を忘れない

ご清聴ありがとうございました！



【引用元】

<https://www.el-roi.jp/el/index.html>

<https://scikujiin.or.jp/pages/35/>

<https://musubie.org/news/7661/>

<https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2023/85202/childcare>

<https://www.asahi.com/sdgs/article/14850707>

<p>進路探究まとめ</p>	<p>この三年間を一言で表すと？</p> <p>「変化」</p> <ul style="list-style-type: none">・パソコンの資格勉強を始めた・体育祭などで係に入って行事を盛り上げていった。・進路活動を積極的にやった
<p>一番悩んだことは何？</p> <p>「進路」</p> <ul style="list-style-type: none">・進路がなかなか決まらず不安にかられていた・進路が決まっても面接練習が上手いはず自信を失っていた	<p>感謝したい人</p> <ul style="list-style-type: none">・親（父、祖母、祖父）・進路活動を支えてくださった先生方
<p>どんな大人になりたいか？</p> <ul style="list-style-type: none">・冷静で物事を判断できる・頼られる人・心が強い人間	<p>大人になっても忘れたくないもの</p> <ul style="list-style-type: none">・感謝を忘れない気持ち・何事も楽しむこと